

時沢宮東遺跡

—店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2006

群馬県勢多郡富士見村教育委員会

序

富士見村は上毛三山の一つ、名峰赤城山の南面に位置し、豊かな自然とともに文化財の宝庫として知られています。富士見村東南部に位置する時沢地区も数多くの文化財に恵まれています。遺跡の所在する時沢地区は、遺物が濃密に分布しており古代におけるこの地の繁栄を物語っています。

今回の発掘調査では平安時代の集落が確認され、文字が書かれている土器も出土しました。また、蛇行しながら南に下だる大溝も確認されました。かつて、こうした大規模な土木工事が行われた背景について、豊かであったこの地区的姿を彷彿とし、興味と占里への郷愁をおぼえざるを得ません。

さて、時沢宮東遺跡の至近には、溜井が確認された時沢西高田遺跡、四面に庇をもつ堀立柱建物跡が確認された東紺屋谷戸遺跡など重要な遺跡が存在しています。このような遺跡の調査成果が多くの人々に活用され学術研究の一助となり、地域史を解明する役を担えることを願います。

最後に、調査の主旨をご理解いただき、ご協力いただきました㈱とりせん、㈱コメリならびに関係者各位、さらに発掘調査に従事していただいた皆様に心より謝意を表し、序といたします。

平成18年12月

富士見村教育委員会
教育長 福島 正章

例　　言

1. 本書は民間開発に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本遺跡は群馬県勢多郡富士見村大字時沢字宮東 776 番外にある。
3. 現地調査期間は平成 18 年 5 月 29 日から平成 18 年 6 月 20 日までである。
4. 発掘調査及び整理調査は富士見村教育委員会の指導のもと、同教育委員会から委託を受けた有限会社毛野考古学研究所が実施した。組織は次のとおりである。

富士見村教育委員会	教　育　長	福島正章
	事　務　局　長	狩野　透
	事　務　局　次　長	狩野眞一
	社会教育係主任	福田貴之
有限会社毛野考古学研究所	伊藤廉倫・高橋清文	

5. 遺構写真は伊藤と高橋、遺物写真は伊藤が撮影した。また、本書の図集は福田・長井正欣（有限会社毛野考古学研究所）・高橋・執筆は第 1 章を福田、他を高橋が行った。
6. 出土遺物及び図面等は富士見村教育委員会で保管している。
7. 本書の作成にあたり以下の諸機関並びに諸氏にご教示、ご協力を賜った。記して感謝したい。
群馬県教育委員会文化課 カネコハウス株式会社 山下工業株式会社
富士見村シルバー人材センター コーエイ株式会社 株式会社洞研 株式会社スカイ・サーヴェイ
小川卓也 小林正 斎藤幸男 桜井和哉 鈴木徳雄 角田真也 水谷貴之 山口逸弘 山下敬信
8. 発掘調査・整理調査は以下の方々が参加した。
石黒秀男 伊能繁雄 井上武志 大友康之 大野藤夫 小川善彦 狩野宇作 狩野庄寿 黒岩洋一
後藤水戸 鈴木徳平 須田次男 鳴澤寅男 根岸恒雄 橋場明則
有山経世 磯洋子 伊藤順一 日沖剛史 山本千春
9. 発掘調査、報告書に要する諸経費は（株）とりせん及び（株）コメリの負担による。

凡　　例

1. 本書で使用した地図は国土地理院発行 1 : 200,000 地形図「長野」「宇都宮」・1 : 25,000 地形図「渋川」「前橋」、富士見村役場発行 1 : 2,500 原形図を用いている。
2. 遺構図中の断面基準線高は標高を表し、遺構図中の方位は座標北を示している。
3. 座標は世界測地系 IX 系を使用している。
4. 遺構図中の「R B」はロームブロック、「S」は棗を意味する。
5. 遺構図の縮尺について、下記を基本とした。各図中のスケールを参照していただきたい。
全体図 1/300 窓穴住居跡 1/30・1/60・1/80 構跡 1/60・1/100 土坑 1/60 小穴（ピット）1/60
6. 遺物図は次の縮尺で掲載した。縄文土器 1/3 土師器・須恵器 1/3 石器 1/2・1/3・1/4
7. 遺物番号は、実測図・観察表・写真図版とともに共通である。
8. 遺物の縮尺は実測図・写真図版とともに共通である。

目 次

序
例 言
凡 例
目 次

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 遺跡の位置と周辺の環境	2
第1節 遺跡の位置	2
第2節 周辺の遺跡	2
第3章 調査の経緯と遺跡の概要	4
第1節 調査の経緯	4
第2節 遺構・遺物の概要	4
第3節 基本土層	4
第4章 A区の遺構と遺物	8
第1節 溝 跡	8
第5章 B区の遺構と遺物	14
第1節 住居跡	14
第2節 土 坑	23
第3節 溝 跡	25
第4節 小 穴 (ピット)	25
第5節 倒木痕	25
第6章 遺構外出上遺物	28
第7章 ま と め	30
第1節 住居跡	30
第2節 土 坑	30
第3節 溝 跡	30
抄 錄	
写真図版	
奥 付	

挿図目次

第1図 遺跡の位置	1	第19図 1号住居跡出土遺物①	16
第2図 周辺の遺跡	3	第20図 1号住居跡出土遺物②	17
第3図 基本土層	4	第21図 2号住居跡	18
第4図 調査区の位置	5	第22図 2号住居跡カマド	18
第5図 A 1区全体図	6	第23図 2号住居跡出土遺物	19
第6図 A 2区全体図	6	第24図 3・4号住居跡①	20
第7図 B区全体図	7	第25図 3・4号住居跡②	21
第8図 1号溝跡（A 1区）①	8	第26図 3号住居跡カマド	22
第9図 1号溝跡（A 1区）②	9	第27図 3・4号住居跡掘り方	22
第10図 1号溝跡（A 1区）出土遺物①	9	第28図 3・4号住居跡出土遺物	22
第11図 1号溝跡（A 1区）出土遺物②	10	第29図 土坑と出土遺物	24
第12図 1号溝跡（A 2区）①	12	第30図 2号溝跡	25
第13図 1号溝跡（A 2区）②	13	第31図 小穴（ピット）	26
第14図 1号溝跡（A 2区）出土遺物	13	第32図 1号倒木痕出土遺物	27
第15図 1号住居跡①	14	第33図 遺構外出土遺物①	28
第16図 1号住居跡②	15	第34図 遺構外出土遺物②	29
第17図 1号住居跡カマド	15	第35図 本遺跡および時沢西高田遺跡の位置	31
第18図 1号住居跡掘り方	16		

挿表目次

第1表 1号溝跡（A 1区）出土遺物観察表	11	第6表 4号住居跡出土遺物観察表	23
第2表 1号溝跡（A 2区）出土遺物観察表	13	第7表 土坑出土遺物観察表	23
第3表 1号住居跡出土遺物観察表	17	第8表 1号倒木痕出土遺物観察表	27
第4表 2号住居跡出土遺物観察表	19	第9表 遺構外出土遺物観察表	29
第5表 3号住居跡出土遺物観察表	23		

図 版 目 次

P L 1 - 1	遺跡の位置と周辺の地形（上が北）	
P L 2 - 1	A区全景（上が南西）	
P L 3 - 1	A 1 区全景（上が北西）	
2	1号溝跡（A 1区）①（南西から）	7 3号土坑（南から）
3	1号溝跡（A 1区）②（南東から）	8 4号土坑（西から）
4	1号溝跡（A 1区）③（南西から）	P L 7 - 1 4号土坑・2～6号小穴（南から）
5	1号溝跡（A 1区）土層（南西から）	2 29～32・37号小穴（南から）
P L 4 - 1	A 2 区全景（上が北西）	3 1号小穴（南から）
2	1号溝跡（A 2区）（北東から）	4 2号溝跡（西から）
3	1号溝跡（A 2区）南側（北東から）	5 1号倒木痕（西から）
4	1号溝跡（A 2区）土層（北東から）	6 1号倒木痕出土状態（西から）
5	1号溝跡（A 2区）上層（南西から）	7 B区全景②（南から）
P L 5 - 1	B区全景①（上が北東）	8 B区作業風景（西から）
2	1号住居跡全景（西から）	P L 8 - 1 1号溝跡（A 1区）出土遺物
3	1号住居跡貯藏穴遺物出土状態（西から）	2 1号溝跡（A 2区）出土遺物
4	1号住居跡カマド十層（北西から）	P L 9 - 1 1号住居跡出土遺物
5	1号住居跡カマド（西から）	2 2号住居跡出土遺物①
P L 6 - 1	2号住居跡全景（西から）	P L 10 - 1 2号住居跡出土遺物②
2	2号住居跡カマド（西から）	2 3号住居跡出土遺物
3	3・4号住居跡全景（西から）	3 4号住居跡出土遺物
4	3・4号住居跡掘り方（西から）	4 1号土坑出土遺物
5	1号土坑（南から）	5 4号土坑出土遺物
6	2号土坑（南東から）	6 1号倒木痕出土遺物①
		P L 11 - 1 1号倒木痕出土遺物②
		2 遺構外出土遺物

第1章 調査に至る経緯

平成18年2月、事業主である（株）とりせんより、群馬県勢多郡富士見村大字時沢字宮東地内における大型店舗建設の事業計画が富士見村教育委員会に掲示され、建設予定地が埋蔵文化財包蔵地内であるか否かの照会があった。この照会を受けて当教育委員会は、開発地は周知の遺跡地外であるが、至近に時沢西高田遺跡や時沢中屋敷遺跡が存在するため、建設予定地内に遺跡の存在する可能性がある旨を説明し、併せて、工事着手前に試掘調査を行い、埋蔵文化財の有無を確認する必要がある事も説明し、了承を得た。また、試掘調査は平成18年度に行うことで合意を得た。

これを受け、平成18年4月18日に事業主より試掘調査依頼書が提出され、同年4月21日から富士見村教育委員会が試掘調査を実施した。試掘調査は遺構の有無ならびに遺構検出面の確認を主目的に、対象地内の地形に合わせて28本のトレーナーを設定した。その結果、建設予定地は中央部から南にかけて谷地状に窪む地形であることが判明したが、東側で大溝、北側で集落、西側で柱穴群の存在が確認された。

試掘調査の結果をもとに、事業主に開発を行う際には、工事に先立ち発掘調査を実施し、記録保存の措置を執る必要がある旨を説明した。その後、発掘調査実施期日や調査費用、調査範囲について数回の協議を重ねたところ、発掘調査を行い記録保存の措置を執ることで合意を得た。また、造成計画の一部に計画変更を要請し了承を得た。

造成計画の大半は盛り土工法であるため、基礎工事による掘削が遺構面に及ぼない部分及び駐車場用地は充分な保護層が得られ、遺構の破壊が回避できると判断し、事業主と当教育委員会との間で「遺跡保存に関する協定書」を締結し、現地保存の措置を講じて、発掘調査の対象から除外した。しかし、基礎工事の掘削や防火槽設置の範囲及び切り土を行う範囲は、遺構の破壊が避けられないため調査対象とした。

また、年度当初の急な発掘調査であり、当教育委員会での対応は困難と思われたため、発掘調査支援機関である有限会社毛野考古学研究所に委託し、当教育委員会がその業務を指導監督することで調査体制を整え、平成18年5月22日に三者による協定を締結し、同年5月29日より発掘調査を実施することになった。

発掘調査期間は梅雨の時期であり、降雨により発掘調査の進捗を妨げられたが、平成18年6月20日に現地での調査を終了した。



第1図 遺跡の位置 (国土地理院発行 1:200,000 「長野」「宇都宮」を67%縮小)

第2章 遺跡の位置と周辺の環境

第1節 遺跡の位置 (第1・2図、PL. 1)

本遺跡が所在する宮土見村は、群馬県の県庁所在地である前橋市の北側に接し、赤城山の南西麓から山頂までの東西約6km、南北約19kmを村域とする。標高は赤城火山の外輪山である黒檜山山頂で最高点1,827m、南側の前橋市と接する大字原之郷付近で標高150m程度となり、標高450m付近を傾斜変換点として北東部の山岳部と南東部の裾野部に大別される。裾野部は西方の開析谷が発達する丘陵と東方の扇状地(白川扇状地)に区分され、白川扇状地の東側には大胡火砕流堆積面、南側には広瀬川低地帯が広がる。河川は法華沢川・細沢川・赤城白川・竜ノ口川・藤沢川などが赤城山麓から南西ないし南流する。本遺跡は白川扇状地に立地し、竜ノ口川により形成された左岸の台地上に位置する。

第2節 周辺の遺跡 (第2図)

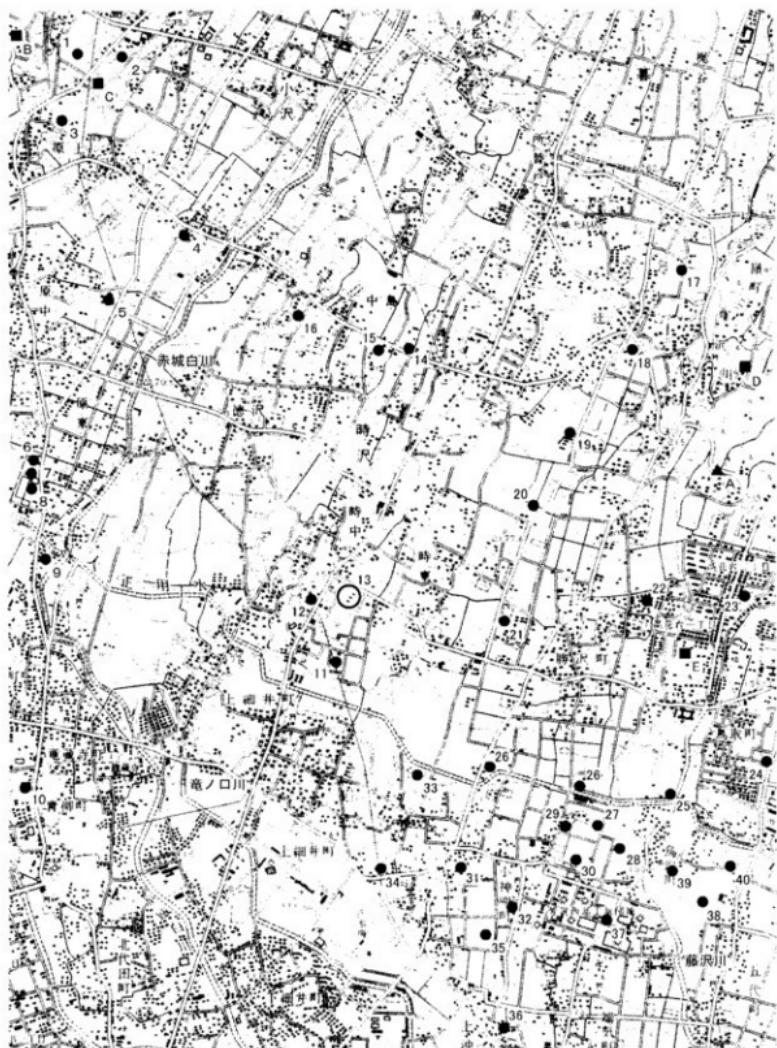
ここでは白川扇状地を中心とした周辺の遺跡について時代ごとに概観する。

旧石器時代の事例は少ない。前橋市鳥取掘藏寺Ⅱ遺跡(39)で細石器・石刀などが出土している。縄文時代になると遺跡が裾野部に広く分布するようになり、特に、前期・中期の事例が増加する。最初に草創期であるが、上百駄山遺跡(20)で隆起線文土器・端気遺跡群(36)で爪形文上器が報告されている。早期は久保田遺跡(3)で後葉の住居跡が調査されているものの、他は土器片が検出される程度である。前期前葉～後葉になると事例が著しく増加し、細沢川や藤沢川流域の由森遺跡(1)・白川遺跡(2)・久保田遺跡・広面遺跡(17)・寺間遺跡(18)・上百駄山遺跡・芳賀北曲輪遺跡(22)・芳賀団地遺跡群(23・24・37)・小神明遺跡群(26～32)などで住居跡が確認されている。中期は赤城白川流域の旭久保C遺跡(7)で中葉の集落が調査されている。後葉になると芳賀北曲輪遺跡・芳賀団地遺跡群・小神明遺跡群・端気遺跡群など藤沢川下流域に纏まり、後期初頭までその傾向は継続する。後期・晚期は遺跡数が希薄となるが、白川遺跡や芳賀団地遺跡群で後期中葉の住居跡が確認されている。弥生時代の事例も少ないが、小神明遺跡群で中～後期の住居跡・端気遺跡群で方形周溝墓が検出されており、分布は扇状地南側に偏在するようである。

古墳時代は久保田遺跡・引切塚遺跡(9)・芳賀団地東道跡で前期・白川遺跡・旭久保遺跡(8)・小神明遺跡群・南田之口遺跡(33)・端気遺跡群で中期～後期・久保田遺跡・旭久保B遺跡(6)・引切塚遺跡・時沢西高田遺跡(12)・組之木原遺跡(21)・芳賀団地遺跡群・芳賀北原遺跡(25)・西堀遺跡(34)・谷端遺跡(35)・島取東原遺跡(40)で後期の集落が調査されており、住居跡の検出件数は後期になって飛躍的に増加する。また、古墳は大字時沢・小沢・原之郷等に比較的多く分布する。村誌では後期～終末期を中心とした約90基に及ぶ存在が報告されているが、現在では耕作等により削平されたものが多い。また、引切塚遺跡・芳賀北曲輪遺跡・芳賀団地遺跡群・東公田古墳(A)などでは調査が実施されている。

奈良・平安時代は遺跡数の増加がさらに進行し、占地も各河川流域に広く分布する。青柳寄居遺跡(10)のように低地でも住居跡が認められるようになる。本遺跡(13)が位置する大字時沢周辺では東緒屋谷戸遺跡(11)・時沢西高田遺跡・時沢中谷遺跡(16)・上百駄山遺跡・組之木原遺跡などの事例が蓄積してきた。時沢の地名は『和妙類聚抄』にみられる「時沢郷」を連想させるが、東に位置する藤沢川流域が「藤沢郷」に想定され、芳賀団地遺跡群などで大規模な集落跡が調査されている。

中・近世は上百駄山遺跡で館跡の詳細な調査が実施された。城跡は猿座城跡・丸山城跡・森山城跡(B)・田島城跡(C)・金山城跡・岡城跡・皆沢城跡・猪城跡(D)・勝沢城跡(E)などが知られている。



1 田森遺跡 2 白川遺跡 3 久保田遺跡 4 小沢の堀遺跡 5 須之間城跡遺跡 6 久保日置跡 7 久保乙置跡 8 久保山遺跡 9 引切城跡 10 青柳密所遺跡
 11 東相模戸戸遺跡 12 時比高田遺跡 13 木道跡 14 時沢庚申遺跡 15 時沢遺跡 16 時比谷遺跡 17 仏面遺跡 18 寺間遺跡 19 保田遺跡 20 上古駄山遺跡
 21 稲之木所遺跡 22 芳賀北山遺跡 23 芳賀北山市地遺跡 24 方賀東御里地遺跡 25 芳賀北原遺跡 26 小神明道跡 27 九科遺跡 28 西山遺跡 29 美里遺跡
 30 貴木遺跡 31 谷向遺跡 32 大明持遺跡 33 南山之口遺跡 34 西根遺跡 35 谷塙遺跡 36 美鬼塙跡群 37 芳賀内南地遺跡 38 烏取尾城跡 39 美取
 福藏寺II遺跡 40 角取末原遺跡 A 東公田古墳 B 森山城跡 C 田島城跡 D 塚城跡 E 滅武城跡

第2図 周辺の遺跡 (国土地理院発行 1:25,000「渋川」「前橋」)

第3章 調査の経緯と遺跡の概要

第1節 調査の経緯 (第4図)

本調査区域は溝跡が主体を占めるA1区・A2区、集落が主体を占めるB区の3箇所に分かれており、開発工事の日程を考慮してA1区→A2区→B区の順序で作業を進めた(平成18年5月29日～6月20日)。

調査は重機を使用した表土除去から実施し(5月29日～6月1日)、その後、手作業による遺構確認に努めた(5月30日～6月15日)。ただし、A区の溝跡は規模が大きいため、土量や調査期間等を鑑み、上層部分を重機によって除去することとした。遺構掘削は上層観察用に埋没土の一部を確保して進め、住居跡はベルトを十字に残し、土坑・小穴は平面の中央で截断し、溝は適した部分でベルトを設けた。遺構が調査区域外にかかる場合はその境界壁面を利用して土層観察を行っている。住居跡は床面までの調査の後、掘り方の調査に移行した。また、必要に応じて断ち割り調査も実施している。遺物は遺構単位で一括して取り上げたが、床面・底面に近いもの、残りの良いものは図面や写真による出土状態の記録を残した。

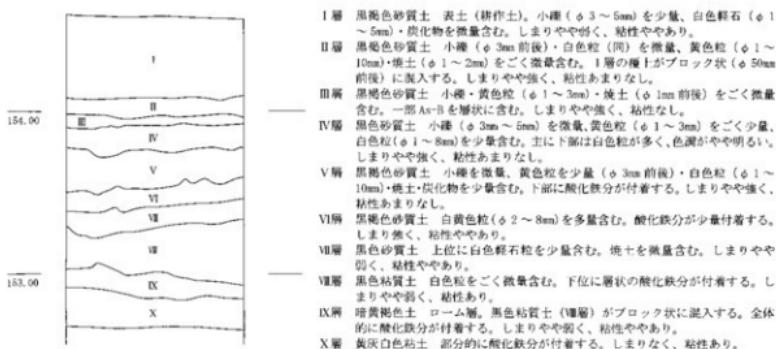
測量はトータルステーション、写真撮影は白黒・カラースライドフィルムの35mmカメラおよびデジタルカメラを使用し、調査の進捗に併せて随時実施した。また、ラジコンヘリコプターによる空からの撮影も2度実施している(A区:6月5日、B区:6月15日)。

第2節 遺構・遺物の概要 (第6・7図、PL.2・5)

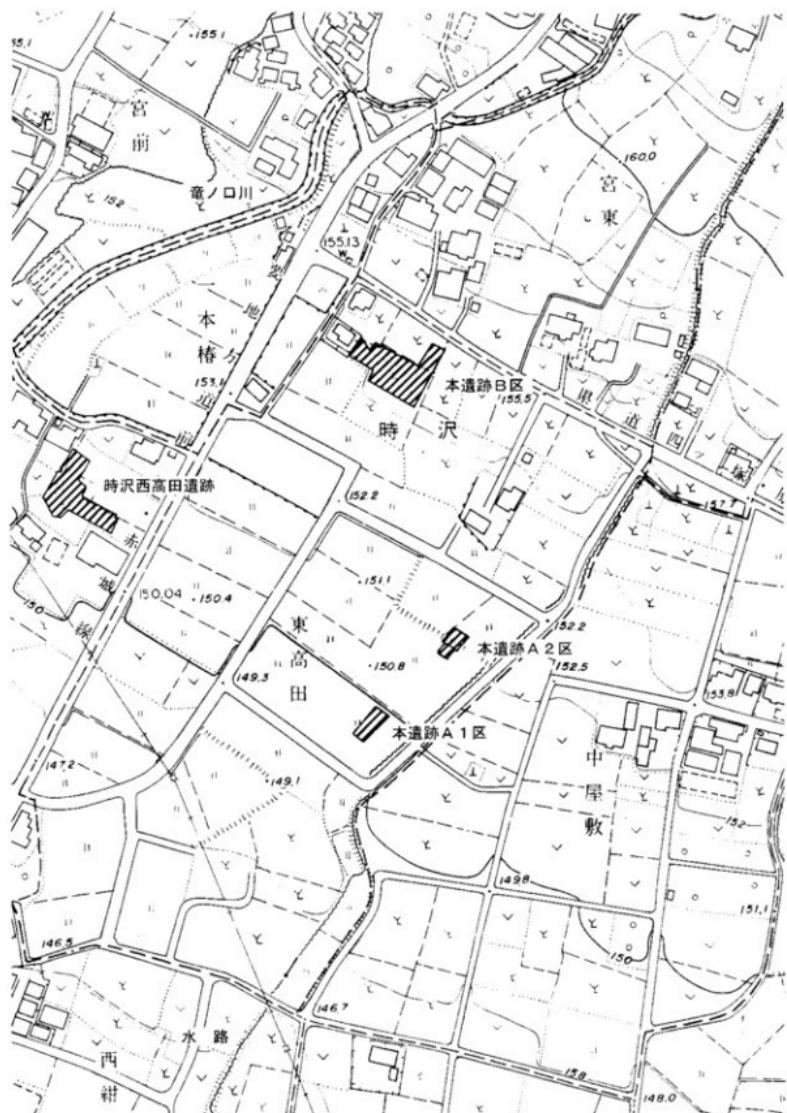
本遺跡では、A区で溝跡1条、B区で竪穴住居跡4軒、溝跡1条、土坑4基・小穴(ピット)42基・倒木痕に接する遺物集中部1箇所が確認され、縄文時代前期・中期の土器、石器、古墳時代後期から平安時代の土師器・須恵器・羽釜、中近世の陶磁器類などが出土した。

第3節 基本土層 (第3図)

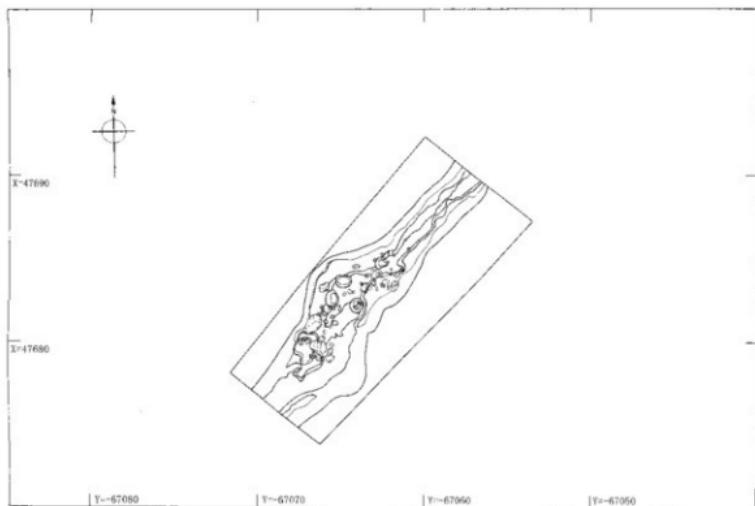
本遺跡は北東から南西にかけて傾斜する。IX・X層で比較するとB区-A2区間(151m)は約1.8m、A1区-A2区間(57m)は約1.5mの高低差が確認されている。遺構確認はIX層上面で実施しているが、IX層は上層との漸移層が介する部分も認められる。基本土層は残りの良いB区の事例を示す。



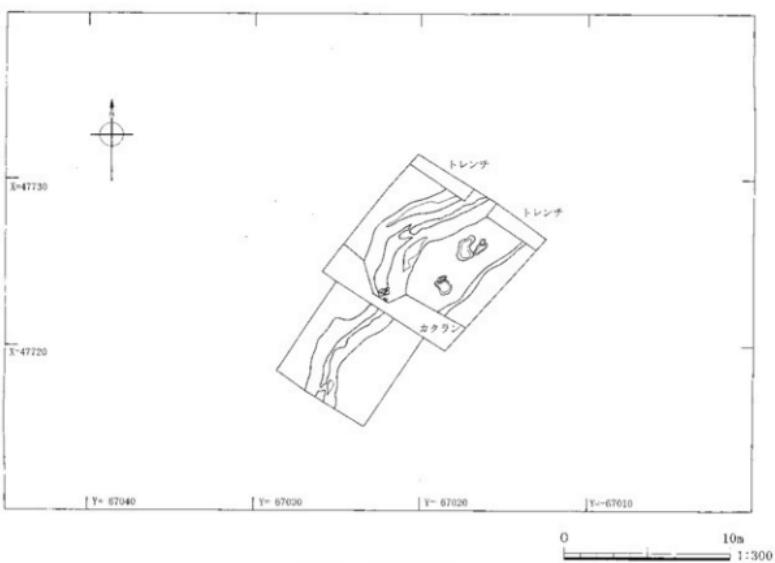
第3図 基本土層 (1:30)



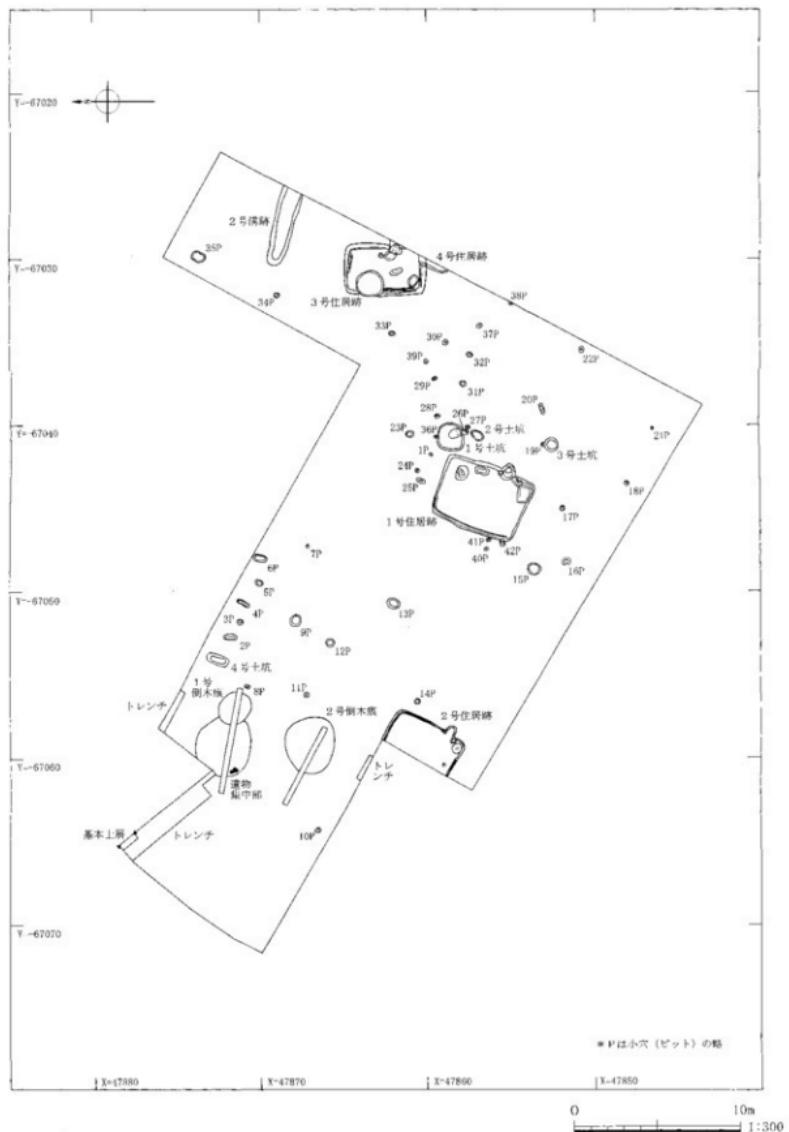
第4図 調査区の位置 (富士見村役場発行 1 : 2500 原形図)



第5図 A1区全体図



第6図 A2区全体図



第7図 B区全体図

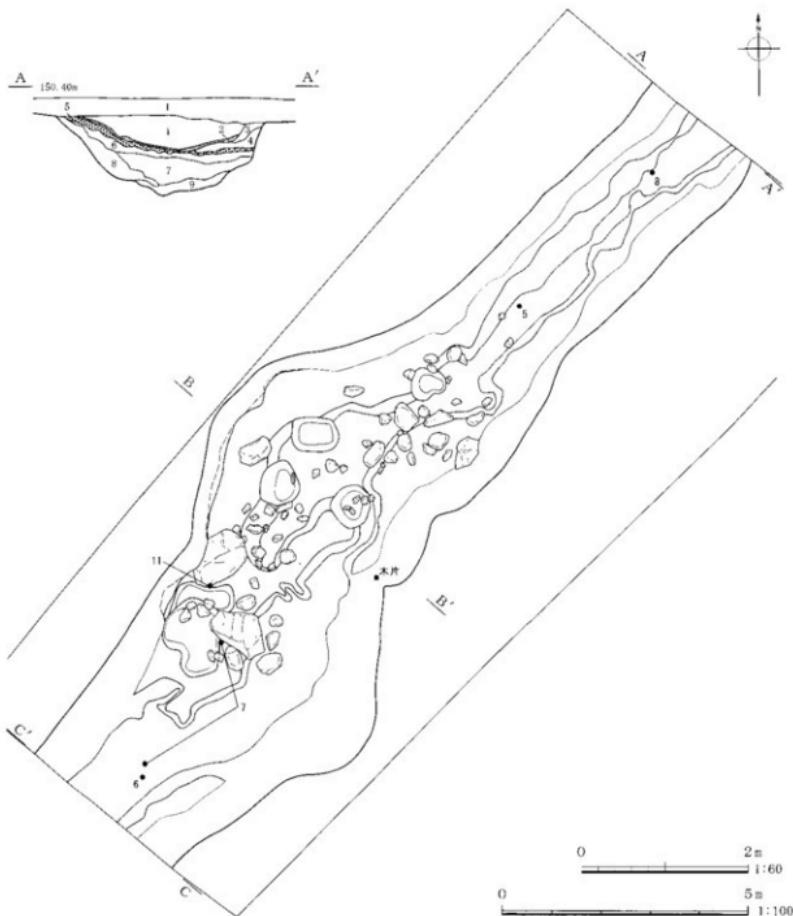
第4章 A区の遺構と遺物

第1節 溝 跡

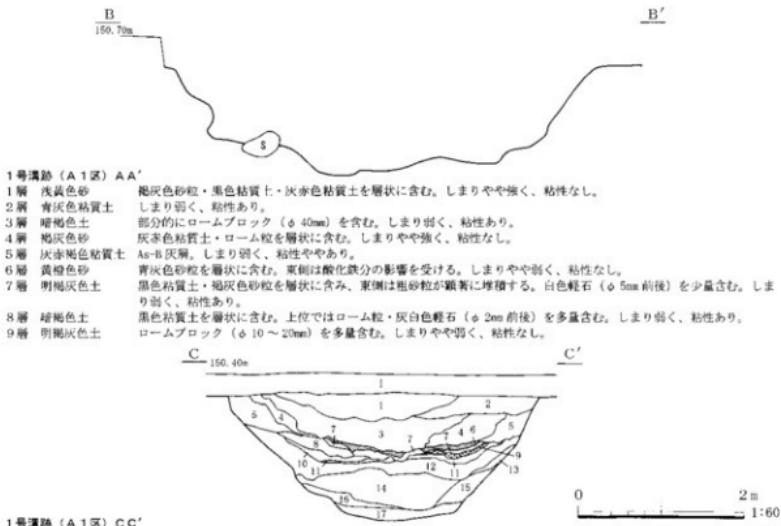
1号溝跡（遺構：第8・9・12・13図、PL.3・4 / 遺物：第10・11・14図、第1・2表、PL.8）

位 置 A 1 区・A 2 区に位置し、試掘調査ではさらに北東・南西方向に延びることが確認されている。

形 態 主軸方位はA 1 区がN -41.0° - E、A 2 区がN -37.5° - Eで、およそ北東-南西方向に走行する。



第8図 1号溝跡（A 1 区）①

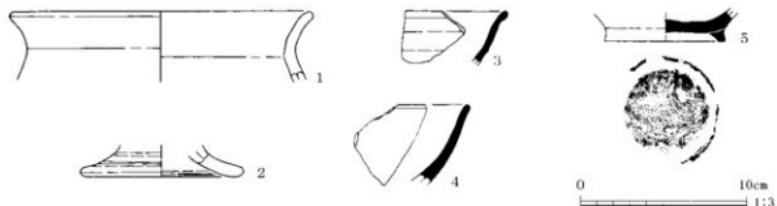


1号溝跡 (A 1区) C-C'

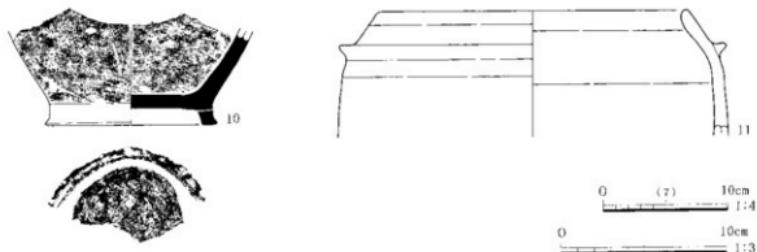
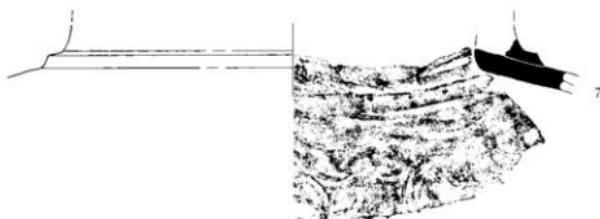
1層 暗褐色土
2層 暗褐色土
3層 暗褐色土
4層 青灰色砂
5層 暗褐色粘質土
6層 暗褐色土
7層 暗褐色砂
8層 黑褐色土
9層 暗褐色粘質土
10層 暗褐色砂
11層 淡黄色砂
12層 灰褐色砂
13層 暗褐色土
14層 暗褐色砂
15層 暗褐色砂
16層 白灰色粘質土
17層 暗褐色砂

白色輕石 ($\phi 2 \sim 10\text{mm}$)・灰白色輕石 ($\phi 2\text{mm 前後}$) をやや多く含む。しまり強く、粘性ありません。
黄褐色砂粒を層状に含む。炭化物 ($\phi 5\text{mm 前後}$) を少量、灰白色輕石 ($\phi 2\text{mm 前後}$) をやや多く含む。しまり弱く、粘性ややあります。
部分的に墓地色の砂粒を含む。白色輕石 ($\phi 5\text{mm 程度}$) を少量、灰白色輕石 ($\phi 5 \sim 10\text{mm}$) をやや多量、ローム粒を少量含む。しまりやや弱く、粘性あります。
淡黄色砂粒・暗褐色粘質土を層状に含む。しまりやや弱く、粘性なし。
灰白色輕石 ($\phi 2\text{mm 以下}$) をやや多く、壁面にロームブロック ($\phi 2 \sim 10\text{cm 程度}$) を多く含む。しまりやや強く、粘性あります。
しまり弱く、粘性あります。
ローム粒をやや多く含む。灰赤色・青灰色粘質土を部分的に含む。しまりやや弱く、粘性ややあります。
黑色粘質土を層状に含む。炭化物 ($\phi 10\text{mm 前後}$) を少量含む。しまり弱く、粘性あります。
Ae-B 地下室。しまり弱く、粘性ややあります。
しまりやや弱く、粘性なし。
青灰色砂粒を層状に含む。しまりやや弱く、粘性なし。
黒色、白灰色粘質土・淡黄色砂粒を層状に含む。灰白色輕石 ($\phi 2\text{mm 前後}$) ・ロームブロック ($\phi 10\text{mm}$) をやや多く含む。しまり弱く、粘性なし。
黒色粘質土を層状に含む。しまり弱く、粘性あります。
小塊 ($\phi 10 \sim 30\text{mm}$) ・黑色粘質土・ロームブロック ($\phi 10 \sim 20\text{mm}$) を層状に含む。白色輕石 ($\phi 10\text{mm 前後}$) を少量、ロームブロック ($\phi 5 \sim 10\text{mm}$) を多量含む。しまりやや弱く、粘性なし。
黑色粘質土を層状に含む。白色粘土ブロック ($\phi 5 \sim 20\text{mm}$) を少量含む。しまり弱く、粘性ややあります。
黑色粘質土を層状に含む。しまり弱く、粘性あります。
小塊 ($\phi 10 \sim 30\text{mm}$) を含む。白色輕石 ($\phi 10\text{mm 前後}$) を少量含む。しまり強く、粘性なし。

第9図 1号溝跡 (A 1区) ②



第10図 1号溝跡 (A 1区) 出土遺物①



第11図 1号溝跡（A1区）出土遺物②

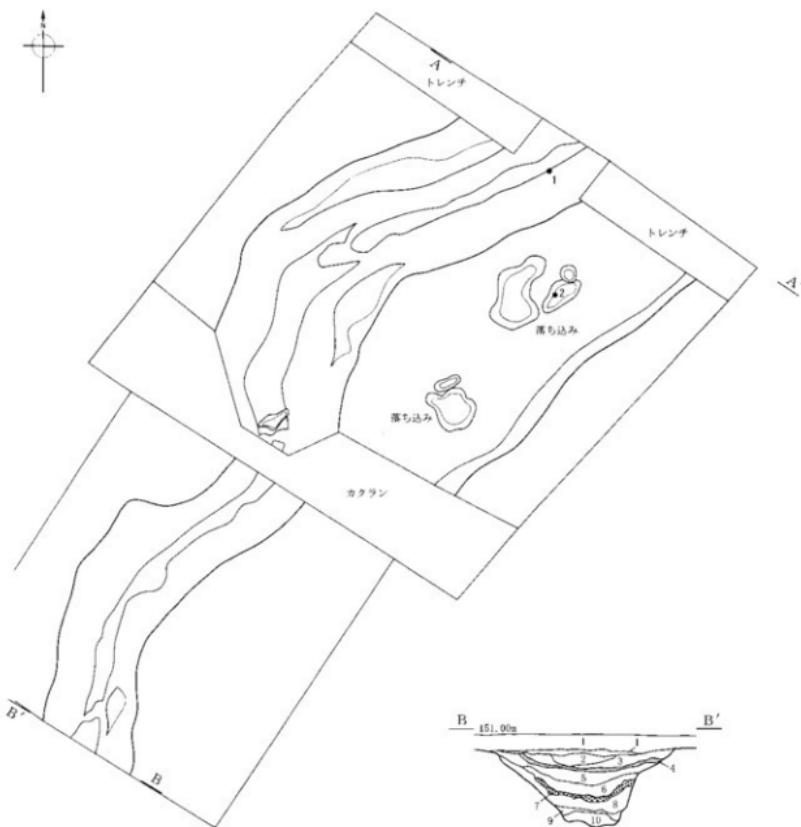
ただし、A 1 区南側や A 2 区では蛇行を繰り返している。幅は 1.42 ~ 4.83 m で、A 1 区南側が広い。深さは 46 ~ 155cm にわたるもの、確認面の残存状態に左右されるようである。底面の標高は地形に沿って傾斜するが、段によって急に標高を低くする部分もある。断面は「V」字状ないし台形状を呈し、立ち上がりの途中で段を有する部分も認められた。なお、A 1 区中央では壁面の上位が下位よりも張り出している。埋没土中には砂状の軽石・灰赤褐色粘質土（浅間 B 軽石）や青灰色粘質土（船川テフラ）の堆積が顯著に認められ、降灰時における構造の状態を知ることができる。また、A 2 区北側の第 1 層は人為的な再振削を窺わせ、埋没が進行した後も流路の規模を縮小させながら存続していた可能性を示唆している（第 13 図）。

テラス 確認面の残存状態が良好な A 2 区北側では広い棚状の平坦面が認められ、幅 2.68 ~ 4.04 m に及ぶ、底面には凹凸があり、土坑状の落ち込みも認められる。

遺物 土師器甕・台付甕・須恵器壺・壇・甕・大甕・瓶、羽釜などが出土している。A 1 区では溝跡の下層～底面直上で須恵器片（10 図 5、11 図 6 ~ 8）や羽釜片（11 図 11）、A 2 区では底面上やテラスの落ち込み部分で須恵器片（14 図 1・2）が検出されている。また、A 1 区中央東壁中に竹と思われる黒色化した木片（長さ 10cm・径 5cm 程）が刺さった状態で確認された。なお、A 1 区中央で大型の礫が多量に露出しているが、断ち割りによる調査の結果、地山土中のものであることが観察された。礫はいずれも安山岩を石材とする角・亜角礫である。

第 1 表 1 号溝跡（A 1 区）出土遺物観察表（第 10・11 図、PL. 8）

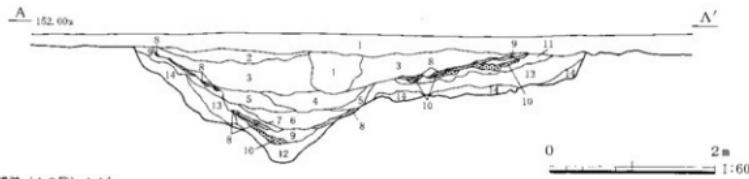
番号	器種	法量	①胎土 ②色調 ③施成	文様・成・整形の特徴		備考
				外面	内面	
1	土師器 甕	口径 [18.4] 底径 (4.2)	①チャート、輝石 ②ぶ; 黄褐色 5YR7/4 ③酸化鉄	口縁部はヨコナデで、外反して開く。 内面 口縁部はヨコナデ。		口縁部片。
2	土師器 台付甕	口径 — 底径 [9.9] 器高 (1.9)	①白色粒、チャート ②明赤褐色 SYR5/6 ③酸化鉄	外面 台盤は木口状工具ナデで、外反して開く。 内面 台盤は木口状工具ナデ。		台部片。
3	須恵器 壺	口径 — 底径 — 器高 —	①白色粒、黒色粒 ②灰色 N6/ ③還元焰	外面 体部はロクロ整形。 内面 体部はロクロ整形。		口縁部片。
4	須恵器 壺	口径 — 底径 — 器高 —	①チャート、輝石 ②灰白色 SY6/2 ③酸化鉄、やや軟質	外面 体部はロクロ整形。 内面 体部はロクロ整形。		口縁部片。
5	須恵器 壺	口径 — 底径 7.3 器高 (2.0)	①白色粒、チャート ②火灰色 7.SY6/1 ③還元焰	外面 底部は回転糸切り後に高台貼付し、両縁をナデ。 内面 ロクロ整形。		底部はほぼ完存。
6	須恵器 甕	口径 — 底径 — 器高 —	①白色粒、チャート ②暗灰色 N3/ ③還元焰	外面 口縁部はロクロ整形、崩塌き波状文。口唇部は下方に伸びる。 内面 口縁部はロクロ整形。		口縁部片。
7	須恵器 大甕	口径 — 底径 (5.5)	①白色粒、チャート ②灰色 N5/ ③還元焰	外面 肩部に灰かぶり。頸部に崩落帶。 内面 脚部は同心円状の当て具痕、肩部はナデ。		頸部～肩部片。
8	須恵器 甕	口径 — 底径 — 器高 —	①白色粒、黒色粒 ②灰色 10Y6/1 ③還元焰	外面 制器は大半が摩滅するがハケ目。 内面 制器は同心円状の当て具痕。		脚部片。
9	須恵器 甕	口径 — 底径 [12.3] 器高 (7.6)	①白色粒、チャート ②暗灰色 N3/ ③還元焰	外面 制器はヘラナデ、底部はヘラ削り。 内面 制器はヘラナデ。		脚部下位～底部片。
10	須恵器 瓶	口径 — 底径 [10.3] 器高 (5.7)	①白色針状粒、チャート ②灰色 N6/ ③還元焰	外面 脚部はナデで下端をへら削り、底部はヘラ起こし後、高台貼付し両縁をナデ。 内面 制器は木口状工具ナデ。		脚部下位～底部片 1/2 残。
11	羽 蓋	口径 [18.6] 底径 — 器高 (7.5)	①白色粒、輝石 ②浅黄色 2.5Y7/3 ③酸化鉄	外面 口縁部は縫貼付後にロクロ整形、脚部はヘラ削り。 内面 口縁部はロクロ整形、脚部はナデ。		口縁部 1/4 残。



1号溝跡（A 2区）B-B'

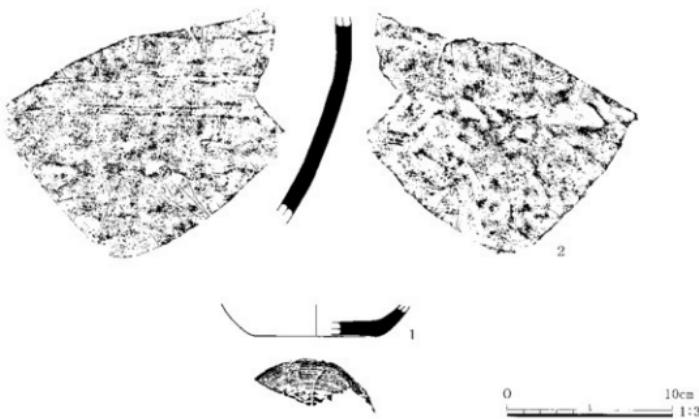
- | | | |
|-----|---------|--|
| 1層 | 褐色灰土 | 白色軽石（φ 2～10mm）をやや多く含む。部分的にロームブロックを含む。しまり強く、粘性なし。 |
| 2層 | 黄褐色砂 | 小塊（φ 5～10mm）を層状に含む。白色軽石を少量含む。酸化鉄分が付着する。しまり強く、粘性なし。 |
| 3層 | 灰褐色砂 | 白色軽石（φ 5mm前後）を少量含む。部分的に酸化鉄分が付着する。しまりやや強く、粘性なし。 |
| 4層 | 青灰色粘質土 | しまり弱く、粘性あり。 |
| 5層 | 浅黄色砂 | 黒色粘質土が厚さ10mm前後の層状に堆積する。しまりやや強く、粘性なし。 |
| 6層 | 青灰色砂 | 灰赤褐色粘質土（部分的に黄灰色を帯びる）が層状に堆積。しまりやや強く、粘性なし。 |
| 7層 | 灰赤褐色粘質土 | Ae-B灰層。しまり弱く、粘性ややあり。 |
| 8層 | 浅黄色砂 | 青灰色砂層が層状に堆積。酸化鉄分が付着する。しまりやや強く、粘性なし。 |
| 9層 | 黑褐色粘質土 | しまり弱く、粘性あり。 |
| 10層 | 褐灰色砂 | しまり弱く、粘性なし。 |

第12図 1号溝跡（A 2区）①



- 1号溝跡 (A 2 区) AA'
- 1層 明褐色土 白色軽石を含む。小礫 (ϕ 5 ~ 10mm) - 浅黄~青灰色砂粒を層状に含む。ロームブロック (ϕ 10mm 前後) を多量含む。
 - 2層 褐灰色土 白色軽石 (ϕ 2 ~ 5mm) を多量、ロームブロック (ϕ 2mm 前後) を少量含む。しまり強く、粘性あまりなし。
 - 3層 棕灰色土 灰色砂粒を層状に含む。部分的にロームブロック (ϕ 10mm 前後) を含む。しまりやや弱く、粘性あり。
 - 4層 棕灰黄色砂質土 黒色粘質土を層状に含む。ロームブロック (ϕ 10mm 前後) を少量含む。しまりやや弱く、粘性あまりなし。
 - 5層 棕灰色土 部分的に灰色砂粒を含む。
 - 6層 棕灰黄色砂質土 白色軽石を含む。小礫 (ϕ 5 ~ 10mm) を層状に含む。しまり弱く、粘性あまりなし。
 - 7層 棕灰色土 部分的に灰色砂粒を含む。しまり弱く、粘性あり。
 - 8層 青灰色粘質土 しまり弱く、粘性あり。
 - 9層 褐灰色砂 部分的に酸化鉄分が付着する。しまりやや強く、粘性なし。
 - 10層 灰青褐色粘質土 As-炭灰層。しまり強く、粘性ややあり。
 - 11層 棕灰色砂 しまりやや強く、粘性なし。
 - 12層 浅黃色土 青灰色砂粒を層状に含む。しまりやや強く、粘性なし。
 - 13層 黑褐色土 白色軽石 (ϕ 2~5mm) - 灰白色軽石をやや多く含む。ロームブロック (ϕ 10~30mm) - 炭化粒 (ϕ 2mm 前後) を少量含む。しまりやや強く、粘性あり。
 - 14番 棕灰色土 白色軽石 (ϕ 2mm 前後) - 灰白色軽石・炭化粒を少量含む。しまり強く、粘性あり。

第13図 1号溝跡 (A 2 区) ②



第14図 1号溝跡 (A 2 区) 出土遺物

第2表 1号溝跡 (A 2 区) 出土遺物観察表 (第14図, PL. 8)

番号	器種	法量	①軸上 ②色調 ③施成	文様、成・禁形の特徴		備考
				外面部	内面部	
1	須恵器 壺	口径 底径 [7.4] (2.0)	①白色灰、黒色粒 ②灰褐色 NS/ 施成 ③濃元培	体部はクロセ形、底部は回転系切り後、周縁部を ヘラ削り。 内面 クロセ形。		体部下位～底部 1/3強。
2	須恵器 甕	口径 底径 器高 —	①白色灰、チャート ②灰色 NS/ ③濃元培	外面部 開口部はナデ。 内面 胴部は無文の当て具痕。		胴部片。

第5章 B区の遺構と遺物

第1節 住居跡

1号住居跡（遺構：第15～18図、PL.5 / 遺物：第19・20図、第3表、PL.9）

位 置 B区中央に位置する。41・42号小穴と重複し、耕作痕により搅乱される。

形 態 平面は長方形を呈し、主軸方位N-112.5°-E、長軸5.50m、短軸4.24mを測る。床面までの深さは35cm程度で、0～18cmの掘り方を有する。床面はほぼ平坦であり、南半の硬化が著しい。

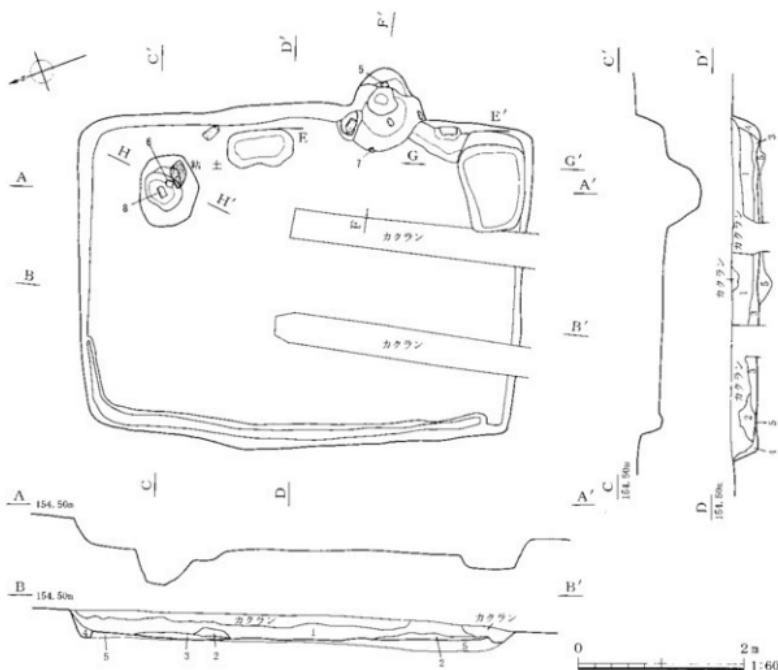
カマド 南東壁のやや南寄りに付設される。袖部が若干残存し、左袖部で礫が出土している。

貯蔵穴 住居跡の東・南隅に2基配されている。東隅の貯蔵穴は平面が橢円形を呈することに対し、南隅の貯蔵穴は方形を呈し、非常に浅い。

小 穴 南東壁寄りに浅い小穴が認められる。また、床面下からは3基の小穴が確認されており、そのうち、2基は深く、黒褐色土とロームブロックを多く含む暗褐色土が互層状に堆積する。

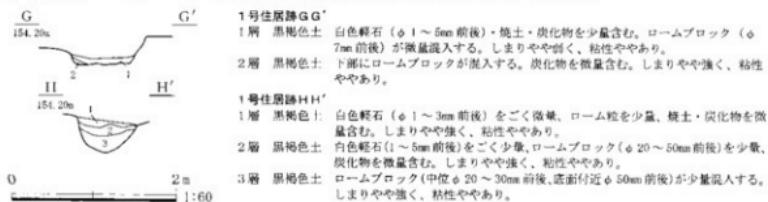
周 溝 北西壁と北東壁の一部に設けられる。

遺 物 士師器壺・甕、須恵器壺・甕・壺、砥石などが出土している。カマドで須恵器壺片（5・7）、北東部の貯蔵穴で墨書きを有する須恵器壺（6）、須恵器甕片（8）・粘土塊が検出されている。

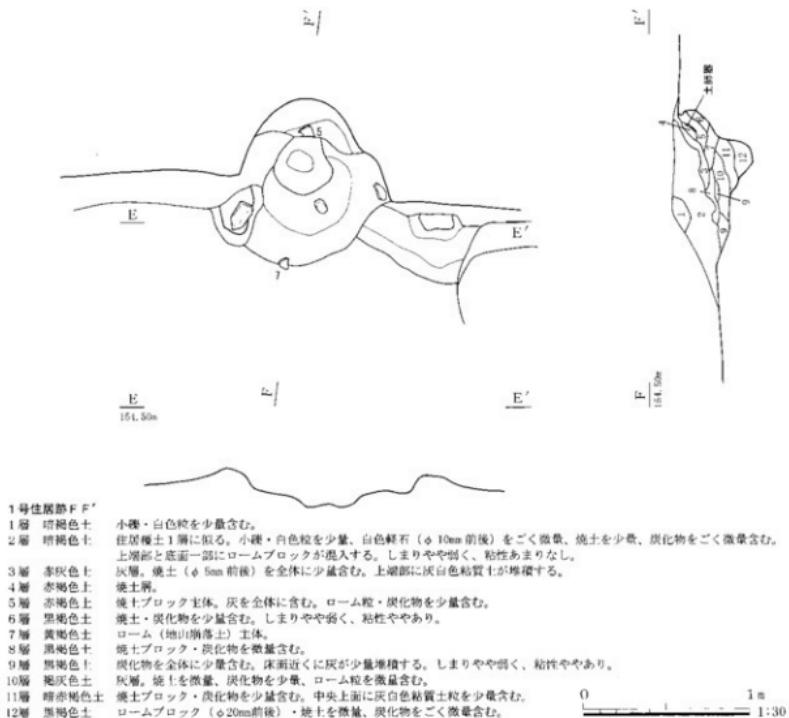


第15図 1号住居跡①

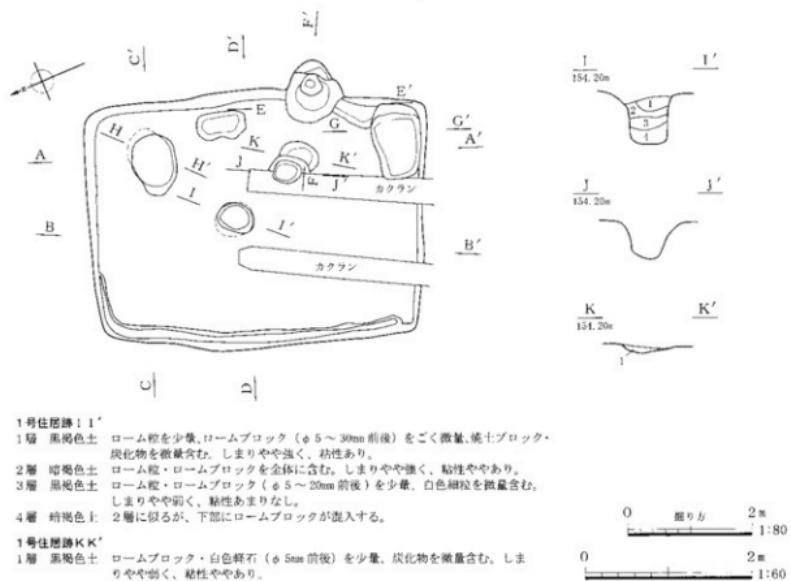
- 1号住居跡 B B'・D D'
- 1層 黒褐色土 ローム粒・白色粒（φ 1～3mm 前後）を少量、白色軽石（φ 8mm 前後）をごく微量、焼土（塊）・炭化物を微量含む。しまりやや弱く、粘性ややあり。
 - 2層 黒褐色土 ローム粒を全体に少量含む。ロームブロック（φ 20～50mm 前後）がごく微量混入する。白色粒（φ 1～5mm 前後）を少量、炭化物を微量含む。しまりやや弱く、粘性ややあり。
 - 3層 黒褐色土 上部にローム粒が微量堆積する。ロームブロックを底面附近に少量（φ 50mm 前後）、中位に微量（φ 20～30mm）含む。しまりやや弱く、粘性ややあり。
 - 4層 黒褐色土 ロームブロックを微量、炭化物を少量含む。しまりやや弱く、粘性ややあり。
 - 5層 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック主体（塊り方）。部分的に焼土・炭化物を少量含む。硬くしまる。



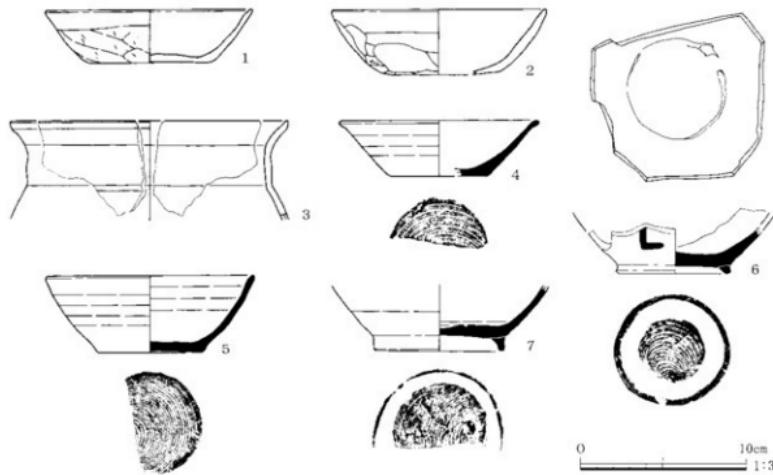
第 16 図 1号住居跡②



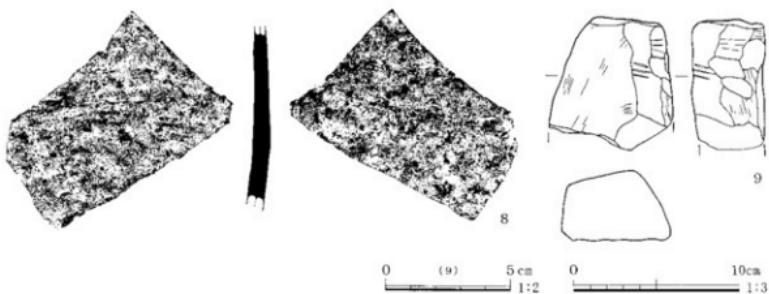
第 17 図 1号住居跡カマド



第18図 1号住居跡掘り方



第19図 1号住居跡出土遺物①



第20図 1号住居跡出土遺物②

第3表 1号住居跡出土遺物観察表（第19・20図、PL. 9）

番号	器種	底盤	①胎土 ②色調 ③焼成	文様、成・整形の特徴	備考
1	土師器 壺	口径 [12.5] 底径 [7.4] 器高 3.2	①白色粒、角閃石 ②灰褐色 5YR5/6 ③焼成焰	外面 口縁部は横ナデ、体部は凹いナデ。底部はヘラ削り。 体部はわずかに内彫して聞く。 内面 口縁部は横ナデ、底部は横ナデ。	口縁～底部 1/3 残。
2	土師器 壺	口径 [13.0] 底径 [7.0] 器高 3.9	①白色粒、チャート ②墨 10Y2/1 ③焼成焰	外面 口縁部は横ナデ、体部はヘラ削り後ナデ。底部はヘラ削り。 体部は内彫気味に立って上がる。 内面 口縁部～体部は横ナデ、底部はナデ。	内外面に黒色處理。1/3 残。
3	土師器 壺	口径 [16.8] 底径 — 器高 (5.9)	①白色粒、角閃石 ②に赤い褐色 5YR5/4 ③焼成焰	外面 口縁部は横ナデ。「コ」の字状口縁。 内面 口縁部は横ナデ。	口縁部片。
4	須恵器 壺	口径 [12.0] 底径 [6.0] 器高 3.4	①白色粒、角閃石 ②浅黄色 2.5YB3 ③還元焰、やや軟質	外面 体部はクロロ整形、底部は回転糸切り無調整。口縁部は外反する。 内面 ロクロ整形。	内外面に煤付着。1/3 残。
5	須恵器 壺	口径 [12.6] 底径 [6.4] 器高 4.6	①白色粒、輝石 ②灰色 5Y6/1 ③還元焰	外面 体部はクロロ整形、底部は回転糸切り後、周縁部をヘラ削り。 内面 ロクロ整形。	口縁～底部 1/2 残。
6	須恵器 壺	口径 — 底径 6.8 器高 (4.0)	①白色粒、輝石 ②灰白色 5Y7/1 ③還元焰	外面 体部はクロロ整形、底部は回転糸切り後に高台貼付し、周縁部ナデ。 内面 ロクロ整形。重ね焼き痕あり。	外面部に墨書き。体部～底部。
7	須恵器 壺	口径 — 底径 7.9 器高 (4.0)	①白色粒、輝石 ②灰白色 5Y7/1 ③還元焰	外面 体部はクロロ整形、底部は回転糸切り後に高台貼付し、周縁部ナデ。 内面 ロクロ整形。	体部～底部 1/2 残。
8	須恵器 壺	口径 — 底径 — 器高 —	①白色粒、チャート ②灰色 N5/ ③還元焰	外面 剥離部は平行タキ後ナデ。 内面 剥離部は墨文の當て具痕。	剥離部。
9	砥 石	長さ : (5.3cm) 幅 : (5.1cm) 厚さ : (3.0cm)	重さ : (103.9g)	石材：滑紋岩	欠損品。

2号住居跡（遺構：第21・22図、PL. 6 / 遺物：第23図、第4表、PL. 9・10）

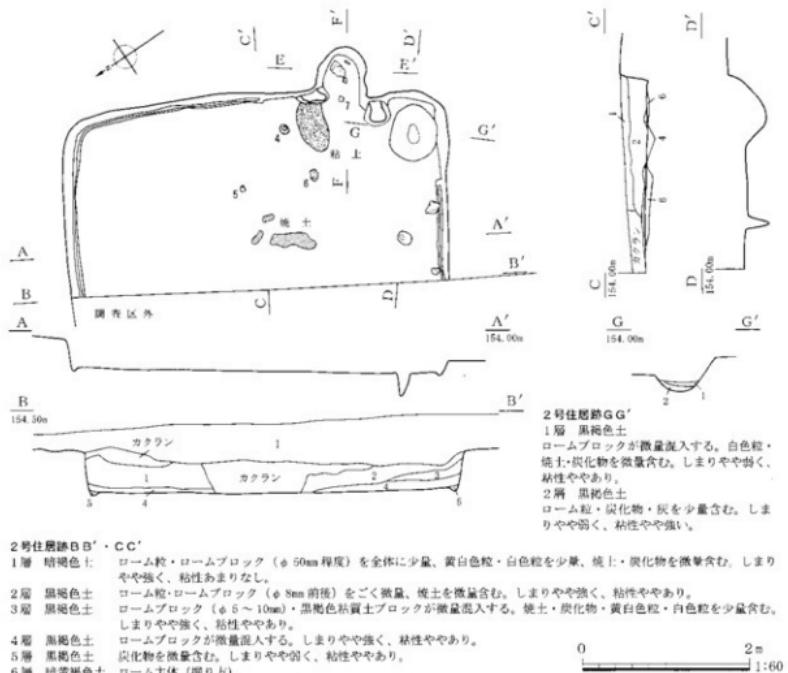
位 置 B区西寄りに位置する。住居跡の北西側は調査区域外にかかる。

形 態 平面は長方形を呈すと推測され、主軸方位N-120.0°-E、長軸4.71m、残存短軸2.42mを測る。床面までの深さは35cm程度で、2~8cmの浅い掘り方を有する。床面はほぼ平坦であり、南半の硬化が著しい。なお、カマドの北東部で粘土塊、住居跡中央付近の床面上で纏まつた焼土が確認されている。

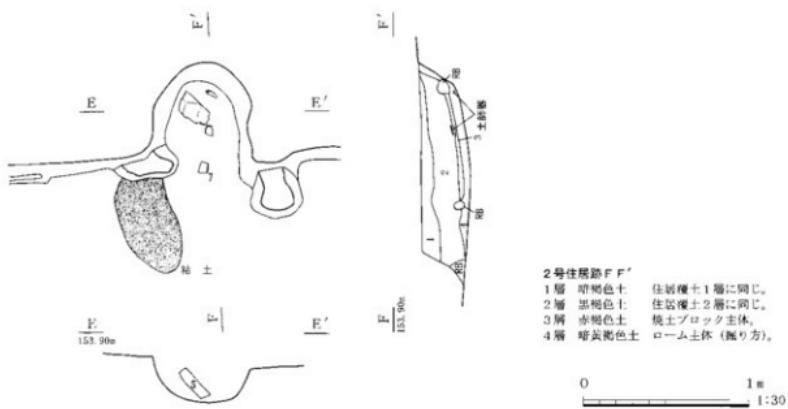
カマド 南東壁の南寄りに付設される。袖部が若干残存し、煙道部で大型の構が出土している。

貯蔵穴 カマドの右脇、住居跡の南隅に1基配されている。平面は楕円形を呈し、下層から隣やカマドのものと推測される灰が確認されている。

小 穴 南西壁寄りに小型の小穴が認められる。



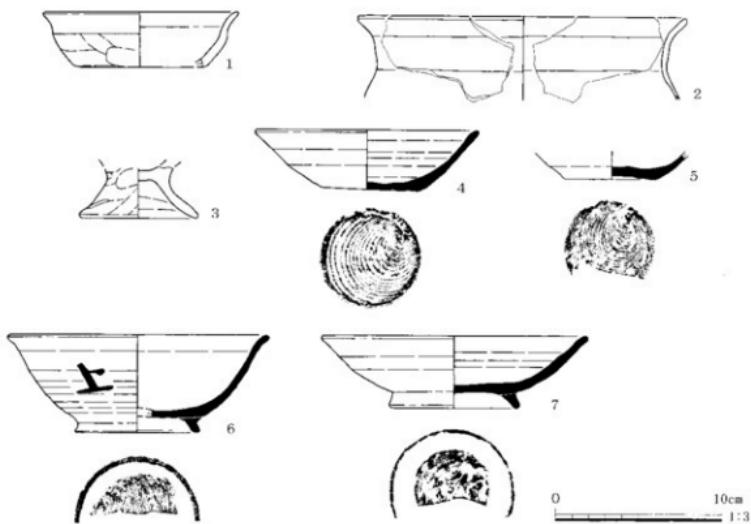
第21図 2号住居跡



第22図 2号住居跡カマド

周溝 確認できる範囲では各壁に沿って設けられているが、カマド・貯藏穴の付近には認められない。

遺物 土師器壺・甕・台付甕・須恵器壺・甕・皿などが出土している。カマドで土師器片や須恵器片（7）、カマド付近・住居跡中央の床面直上で須恵器壺（4・5・6）などが検出されている。そのうち、6の体部には墨書きによる「上」の字が記されている。



第23図 2号住居跡出土遺物

第4表 2号住居跡出土遺物観察表（第23図、PL. 9・10）

番号	器種	法量	①胎土 ②色調 ③施成	文様、成・整形の特徴	備考
1	土師器壺	口径 [11.8] 底径 [8.0] 器高 [3.3]	①白色粘、角閃石 ②にぶい褐色 7.5YR6/4 ③施化粧	外面 口縁部は横ナデ。全体はヘラ削り後ナデ。 内面 口縁部へ体部は横ナデ。	口縁へ体部片。
2	土師器甕	口径 [19.7] 底径 — 器高 (4.9)	①褐色粘、チャート ②にぶい褐色 7.5YR5/4 ③施化粧	外面 口縁部は横ナデ。「コ」の字次口縁。 内面 口縁部は横ナデ。	外面に撚付着。 口縁部片。
3	土師器台付甕	口径 — 底径 7.1 器高 (3.1)	①黒色粘、チャート ②にぶい褐色 7.5YR5/4 ③施化粧	外面 台部はナデ。 内面 台部はナデ。	台部充存。
4	須恵器壺	口径 13.4 底径 5.9 器高 3.6	①片岩、チャート ②灰白色 5Y7/1 ③施元塗	外面 体部はロクロ整形、底部は回転糸切り無調整。口縁部はわずかに外反する。 内面 ロクロ整形。	内面底部に墨痕。2/3枚。
5	須恵器壺	口径 — 底径 5.8 器高 (1.7)	①白色粘、チャート ②灰白色 5Y8/2 ③施元塗	外面 体部はロクロ整形、底部は回転糸切り後、周縁部をヘラ削り。 内面 ロクロ整形。	内面黒色處理。 底部2/3枚。
6	須恵器甕	口径 [15.7] 底径 [7.6] 器高 5.9	①片岩、チャート ②にぶい黄褐色 10YR5/4 ③不完全な還元焰	外面 体部はロクロ整形、底部は回転糸切り後に高台貼付し、周縁部ナデ。口縁部は外反する。 内面 ロクロ整形。	「上」の墨書き。 1/2枚。
7	須恵器皿	口径 [16.0] 底径 7.8 器高 4.4	①白色粘、輝石 ②灰白色 10Y8/1 ③還元焰、やや軟質	外面 体部はロクロ整形、底部は回転糸切り後に高台貼付し、周縁部ナデ。口縁部はわずかに外反する。 内面 ロクロ整形。	口縁へ底部1/3枚。

3号住居跡（遺構：第24～27図、PL. 6 / 遺物：第28図、第5表、PL. 10）

B区東側中央に位置する。住居跡の南東隅は調査区域外にかかり、4号住居跡を擾乱する。

形態 平面は長方形を呈し、主軸方位N-91.0°-E、長軸5.00m、短軸3.14mを測る。床面までの深さは57cm程度で、3~34cmの掘り方を有する。床面には若干の凹凸があり、壁際を除いた部分の硬化が著しい。ただし、南・東・西壁に段を有することや北西部に大型の土坑が検出されていることなどから、上位にも床面が存在していた可能性が推測される。

カマド 東壁のやや南寄りに付設されるが、遺存状態は良くない。

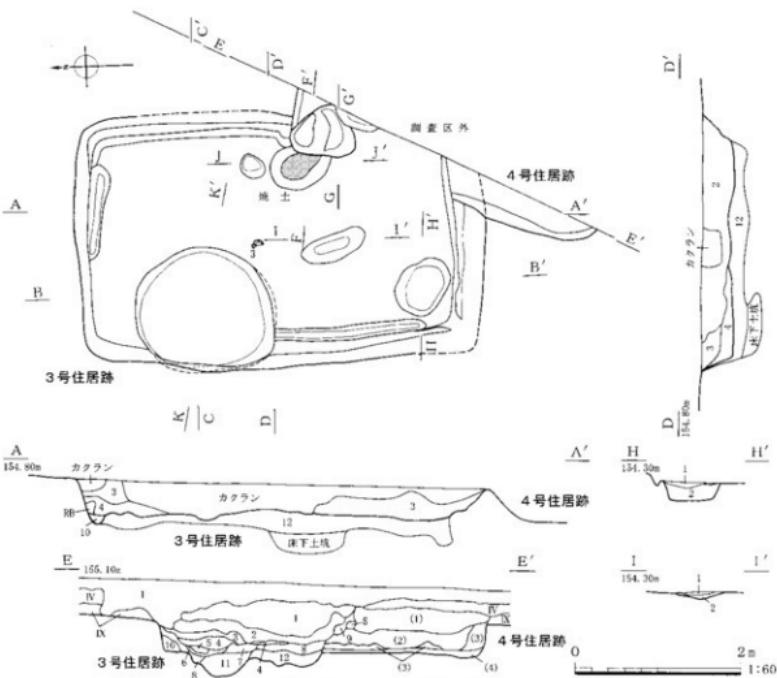
貯蔵穴 住居跡の南西隅に1基配されている。平面は橢円形を呈す。

小穴 カマド付近に2基、住居跡中央に1基が認められる。カマド脇の小穴上層では纏まつた焼土が確認されている。また、貼り床下では南壁寄りの中央で小型の小穴が検出されている。

土 坑 住居跡の北西部で1基確認されている。平面は梢円形、断面は袋状を呈す。貼り床下では住居跡中央に円形の平面を呈する土坑が検出されている。

周溝 北・西壁の一部に設けられる。また、貼り床下では壁に沿った溝状の掘り込みが確認されている。

遺物 土師器壺・甕、須恵器壺などが出土し、住居跡中央の床面直上で須恵器壺(3)が検出されている。



第24図 3・4号住居跡①

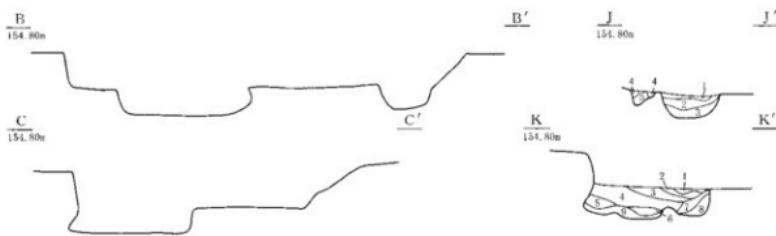
4号住居跡（遺構：第24・25・27図、PL. 6 / 遺物：第28図、第6表、PL. 10）

位 置 B区東側中央に位置する。住居跡のはほとんどは調査区域外にかかり、3号住居跡の擾乱を受ける。

形 態 平面は長方形を呈すと推測され、主軸方位N-116.0°-E、残存長径4.00m・残存短径0.57mを測る。

床面までの深さは52cm程で、3~10cmの掘り方を有する。床面はほぼ平坦である。

遺 物 検出量は少ないものの、土師器片や須恵器蓋（1）などが出土している。



3・4号住居跡A-A'・D-D'・E-E'

1層 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック（φ 50~80mm前後）・小繩・白色粒（φ 2~8mm）を少量、焼土ブロック・炭化物を微量含む。しまりやや弱く、粘性ややあり。

2層 斑状褐色土 1層に似るが大径ロームブロックはなく、黒褐色土ブロック（3層）を少量含み、色調がわずかに暗い。底面付近の一辺に燒土・炭化物を含む。しまりやや弱く、粘性ややあり。

3層 黒褐色土 黄色粒（φ 3~5mm）・白色粒（φ 2~5mm）・燒土・炭化物を微量含む。しまりやや弱く、粘性ややあり。

4層 雰囲褐色土 燃土ブロックを一部に含む。ロームブロック（φ 10~20mm）・黄色粒・黃白色粘質土ブロックを微量・炭化物を少量含む。しまりやや弱く、粘性あまりなし。

5層 赤褐色土 燃土・炭化物主体。

6層 黒褐色土 燃土・炭化物・青灰色粘質土を微量含む。

7層 黒褐色土 ロームブロック（φ 10~30mm）・白色粒（φ 3~5mm）・燒土を微量含む。しまりやや弱く、粘性なし。

8層 黒褐色土 白色粒（φ 1~5mm）・黄色粒（φ 5~8mm）を微量、燒土・炭化物をごく微量含む。しまりやや弱く、粘性あまりなし。

9層 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック（φ 10mm前後）を微量含む。しまりやや弱く、粘性あまりなし。

10層 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック（φ 10~20mm）を微量・灰白色粒（φ 3mm前後）をごく微量、燒土・炭化物を微量含む。しまりなく、粘性ややあり。

11層 暗褐色土 ロームブロック（φ 10~20mm）を全体に含む。黒褐色土（10層）ブロックを少數、灰白色粒（φ 3mm前後）をごく微量含む。しまりやや強く、粘性あり。

12層 黒褐色土 ロームブロック（φ 50mm前後）を全体に含む。炭化物を少量含む。硬くしまる。

(1) 層 黑褐色土 黄色粒（φ 5~8mm）を微量、白色粒（φ 3~10mm）を少量、燒土・炭化物を微量含む。しまりやや強く、粘性あまりなし。

(2) 層 黑褐色土 1層に似るもの白色粒がやや少なく、ロームブロック（φ 5~15mm）を微量含む。しまりやや弱く、粘性あまりなし。

(3) 層 黑褐色土 黄色粒を微量含む。

(4) 層 黑褐色土 ロームブロック（φ 10mm前後）・黄色粒（φ 3mm）をごく微量、白色粒（φ 1~8mm）・燒土・炭化物を微量含む。しまり弱く、粘性ややあり。

3号住居跡H-H'

1層 暗褐色土 灰白色土粒・燒土・炭化物をごく少數含む。しまり弱く、粘性あまりなし。

2層 暗褐色土 ローム（ブロック）主体。燒土を微量含む。しまり弱く、粘性あまりなし。

3号住居跡J-J'

1層 黒褐色土 燃土ブロックを全層に含む。炭化物を微量含む。しまり弱く、粘性ややあり。

2層 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック（φ 10~30mm）を全層に含む。燒土・炭化物を微量含む。しまり弱く、粘性ややあり。

3層 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック（φ 30~50mm）・黒褐色粘質土ブロックを含む。燒土・炭化物を微量含む。

4層 赤黒褐色土 燃土ブロックを全層に含む。粘土粒・燒土・炭化物を微量含む。しまり弱く、粘性ややあり。

5層 暗褐色土 ロームブロックが混入する。粘土粒・灰・燒土・炭化物を微量含む。しまりやや弱く、粘性ややあり。

3号住居跡K-K'

1層 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック（φ 10mm前後）を少量、灰白色粒（φ 5mm前後）を微量含む。しまり弱く、粘性あまりなし。

2層 黒褐色土 ローム粒を微量、灰白色粒をごく微量含む。しまりやや弱く、粘性ややあり。

3層 黒褐色土 ローム粒を微量、ロームブロック（大径）を微量、灰白色粒をごく少數含む。しまりやや弱く、粘性ややあり。

4層 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック（φ 5~8mm）を少量、灰白色粒（φ 5~8mm）を微量含む。しまりやや弱く、粘性ややあり。

4層に似るものロームブロックがあり見られない。色調がやや暗い。

5層 黑褐色土 ローム粒を全層に含む。灰白色粒をごく微量含む。しまり弱く、粘性ややあり。

6層 黑褐色土 6層に似るがロームブロックがわずかに混入する。

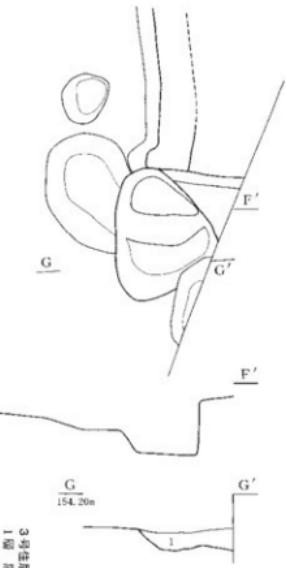
7層 黑褐色土 黄灰白色粘土を微量含む。7層に似るが色調がやや明るく、粘性がやや強い。

8層 喀斯特土 黄灰白色粘土を微量含む。しまり弱く、粘性あり。

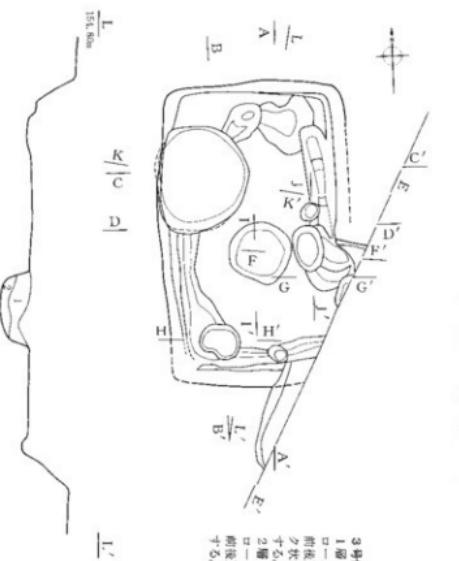
9層 暗褐色土 ローム粒を全層に含む。黄灰白色粘土粒を微量含む。しまり弱く、粘性あり。

O 2m
1:60

第25図 3・4号住居跡②

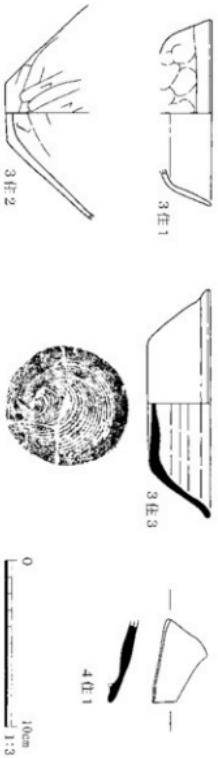


第26図 3号住居跡 G, G'



3号住居跡 G, G'
1層 黒褐色土 住居壁: 1:1断面と同様
1. 厚 約2.5cm ロームブロッカ (φ 10 ~ 100mm
ローラー压入)を含む。黒褐色土 (2層) ブロッカ
状で压入する。板化部分が少なくて、焼
けた。しまり弱く、粘性ややあり。
2層 黒褐色土
ローラー压入。ロームブロッカ (φ 10 ~ 50mm
前後)を含む。底面に板化部分が付着
する。しまり強く、粘性ややあり。

第27図 3・4号住居跡掘り方



第28図 3・4号住居跡出土遺物

第5表 3号住居跡出土遺物観察表(第28図、PL.10)

番号	器種	法量	①胎土 ②色調 ③焼成	文様、成・整形の特徴	備考
1	土師器 壺	口径 [11.2] 底径 — 器高 (3.1)	①白色灰、輝石 ②にぶい褐色 7.5YR7/4 ③酸化焰	外面 口縁部は横ナデ、体部はナデで削い指觸痕。 内面 口縁部～体部は横ナデ。	口縁～体部片。
2	土師器 壺	口径 — 底径 [3.5] 器高 (5.1)	①無色灰、チャート ②にぶい黄褐色 10YR5/3 ③酸化焰	外面 脱部はヘラ削り後一部ナデ、底部はヘラ削り。 内面 ヘラナデ。	外間に塗付着。 腹部下位～底部。
3	須恵器 壺	口径 13.8 底径 7.5 器高 3.8	①白色灰、チャート ②灰褐色 7/4 ③還元焰	外面 体部はロクロ整形、底部は円柱系切り後、周縁部をヘラ削り。口縁部は外反する。 内面 ロクロ整形。底部中央部が座む。	一部欠損。

第6表 4号住居跡出土遺物観察表(第28図、PL.10)

番号	器種	法量	①胎土 ②色調 ③焼成	文様、成・整形の特徴	備考
1	須恵器 壺	口径 — 底径 — 器高 —	①白色灰、黒色粒 ②灰色 N6/ ③還元焰	外面 ロクロ整形。 内面 ロクロ整形。返りが欠損する。	口縁部片。

第2節 土坑

1号土坑(遺構: 第29図、PL.6 / 遺物: 第29図、第7表、PL.10)

位置 B区中央に位置し、26号小穴と重複する。

形態 平面は不正な隅丸方形を呈し、長径167cm・短径156cm・深さ36cmを測る。底面には凹凸があり、西側で焼土や灰が検出されている。また、土坑の中央に小穴状の掘り込みが認められる。

遺物 土師器壺が出土している。また、数点の大型礫が下層に分布する。

2号土坑(遺構: 第29図、PL.6)

位置 B区中央に位置する。

形態 平面は梢円形を呈し、長径84cm・短径49cm・深さ28cmを測る。

遺物 確認されていない。

3号土坑(遺構: 第29図、PL.6)

位置 B区中央やや南東側に位置し、19号小穴と重複する。

形態 平面は円形を呈し、長径84cm・短径80cm・深さ29cmを測る。

遺物 確認されていない。

4号土坑(遺構: 第29図、PL.6・7 / 遺物: 第10図、第7表、PL.10)

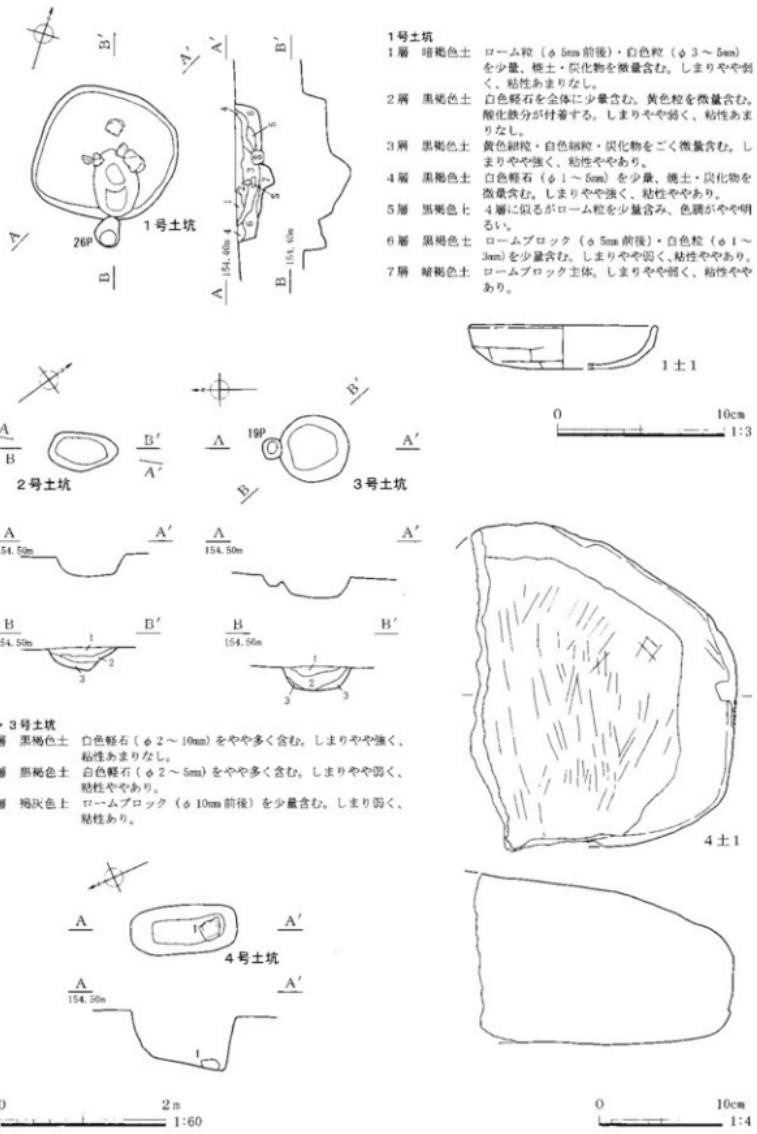
位置 B区北側中央に位置する。

形態 平面は隅丸長方形を呈し、長軸130cm・短軸60cm・深さ72cmを測る。

遺物 底面で大型の砾石が出土している。

第7表 土坑出土遺物観察表(第29図、PL.10)

番号	器種	法量	①胎土 ②色調 ③焼成	文様、成・整形の特徴	備考
1±1	土師器 壺	口径 [11.4] 底径 [5.4] 器高 2.6	①石英、輝石 ②にぶい褐色 7.5YR5/3 ③酸化焰	外面 口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラ削り。 内面 口縁部～体部は横ナデ、底部はナデ。	1/8残。
4±1	鉄石	長さ:(21.4cm) 幅:26.2cm 厚さ:14.0cm 重さ:9750g 石材:輝石安山岩			欠損品。



第29図 土坑と出土遺物

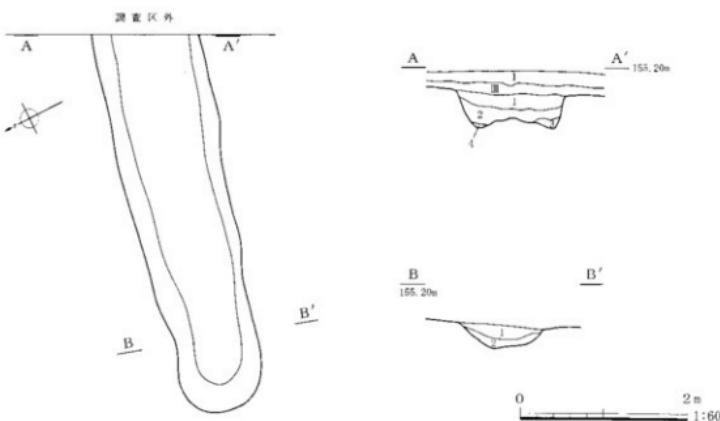
第3節 溝 跡

2号溝跡（遺構：第30図、PL. 7）

位 置 B区北東側に位置し、溝跡の北東側は調査区域外にかかる。

形 態 主軸方位はN -75. 0° - Wで、おおよそ東西方向に走行する。幅は0.97～1.28m・深さは12～41cmを測り、東側の幅が広く、深い。

遺 物 確認されていない。



2号溝跡

1層 黒灰色土 ロームブロック（ ϕ 50mm前後）を少量、ローム粒・白色軽石（ ϕ 2～5mm）を多量含む。しまりやや弱く、粘性あまりなし。

2層 黄灰色土 ロームブロック（ ϕ 50mm前後）を少量含む。しまり弱く、粘性あまりなし。

3層 黒色土 大径のロームブロックが混入する。白色軽石・燒土・炭化物・灰を少量含む。しまりやや弱く、粘性ややあり。

4層 黑褐色土 ロームブロック主体。炭化粒を微量含む。しまり弱く、粘性ややあり。

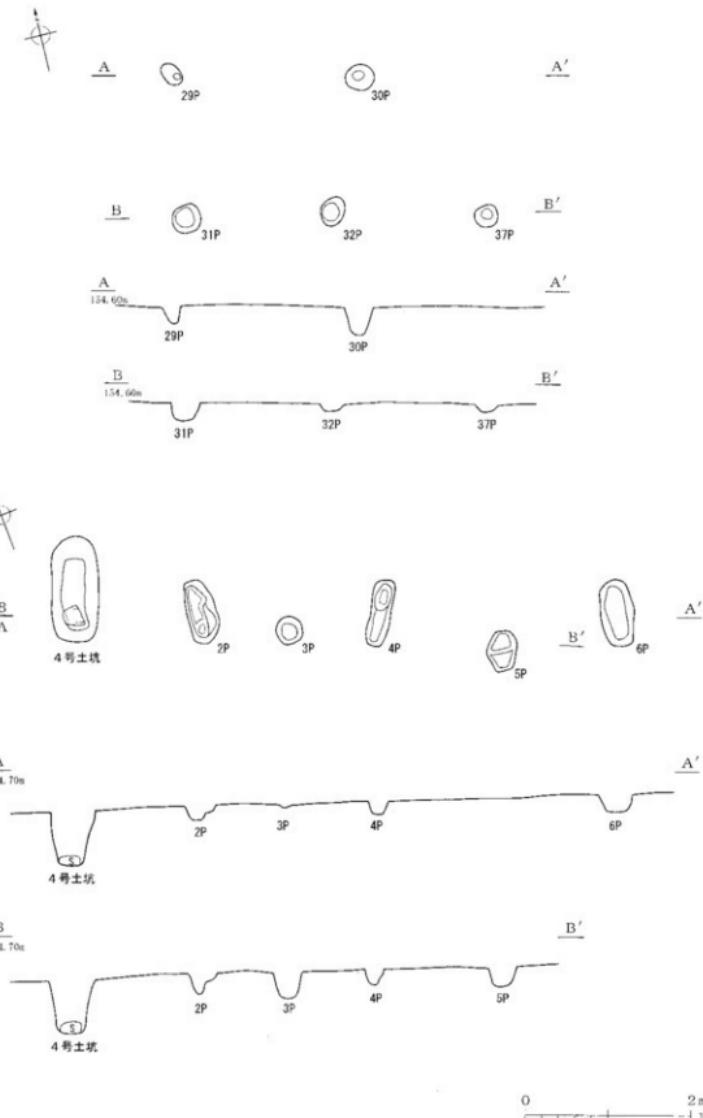
第30図 2号溝跡

第4節 小穴（ピット）（遺構：第7・31図、PL. 7）

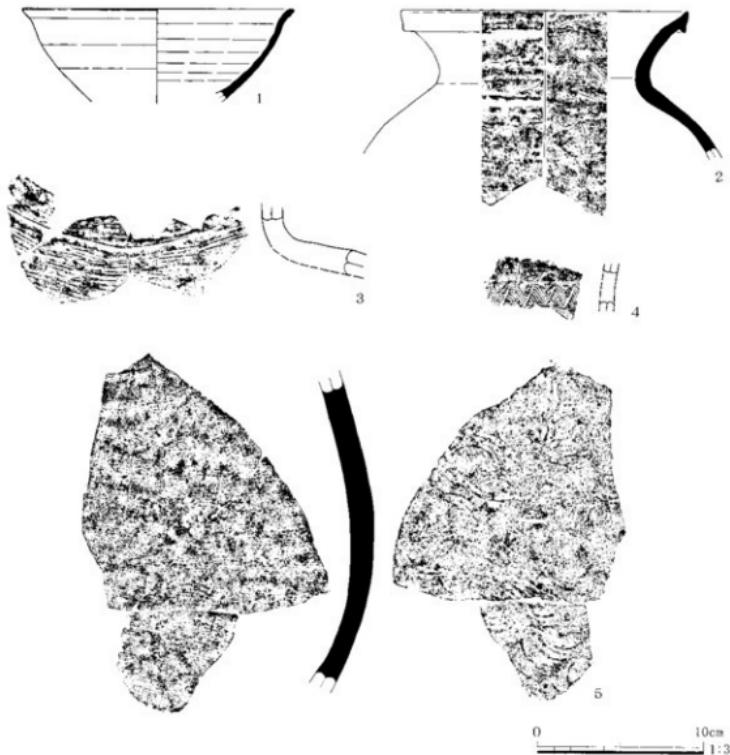
B区で42基確認されている。特に、調査区中央から南側ないし北東部に集中する。調査区北西部・東部で小穴の規則的な配列が廻われるものの（第31図）、掘立柱建物跡等の同定には至らなかった。平面は、P 2・4・6・20が長楕円形を呈すが、円形のものが多い。平均径は41cmで最大はP 35の85cm、最小はP 21の16cm、深さの平均は23cmで、最大はP 9の57cm、最小はP 15・40の7cmである。大半は白色軽石粒を混入する黒褐色土が埋没しているものの、白色軽石粒が無く炭化粒を含むもの（P 7～9・13・15・16・25）も少量認められる。P 6・11で土師器片、P 5で須恵器片、P 13で剝片が出土している。

第5節 倒木痕（遺構：第7図、PL. 7 / 遺物：第32図、第8表、PL. 10・11）

B区西寄りで1号倒木痕・2号倒木痕が確認されている。1号倒木痕は2基が重複し、西端で土師器・須恵器壇・甕の破片や被熱する跡などがまとまって出土している。



第31図 小穴(ビット)



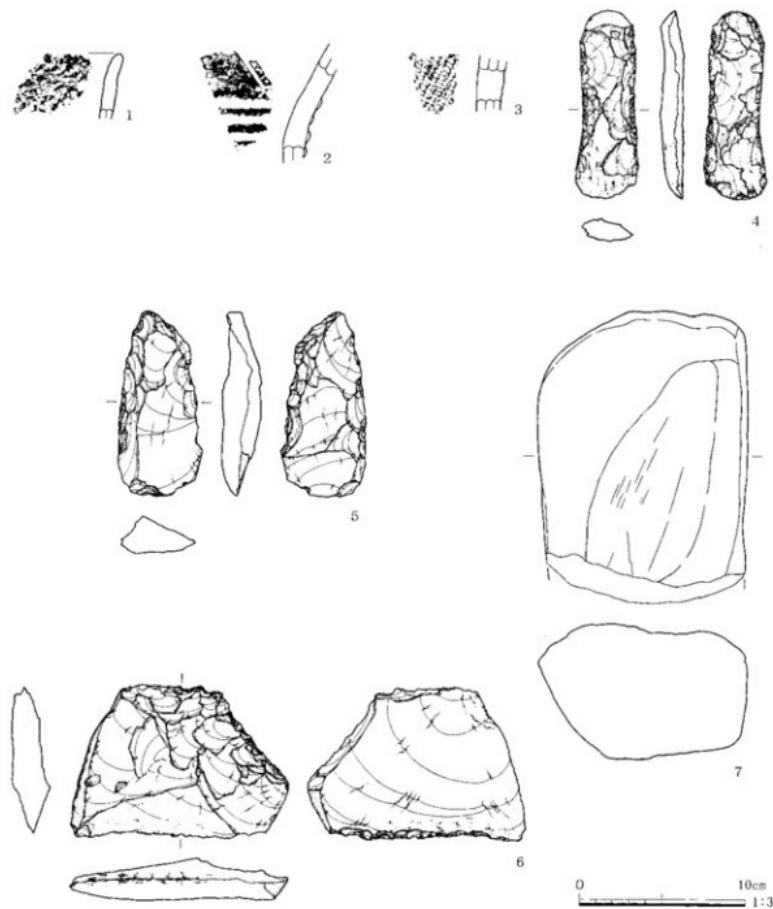
第32図 1号倒木痕出土遺物

第8表 1号倒木痕出土上遺物観察表（第20図、PL. 10・11）

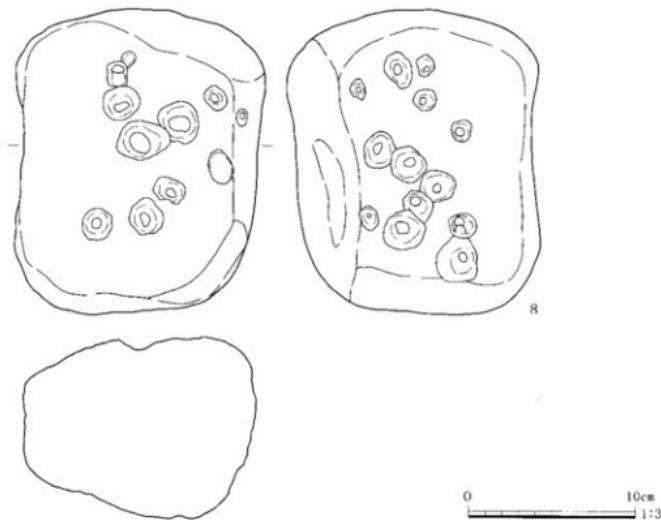
番号	器種	法數	①粉土 ②色調 ③構成	又様、成・整形の特徴		備考
				外側	内側	
1	須恵器 塊	口徑 底径 器高 〔16.4〕 〔5.6〕	①白色粒、チャート ②暗灰黄色 2.5Y5/2 ③不完全な還元焰	外側 体部はロクロ彫形。 内側 ロクロ彫形。		口縁～体部片。
2	須恵器 兔	口徑 底径 器高 〔17.2〕 〔8.8〕	①白色粒、チャート ②暗灰色 N3/ ③還元焰	外側 口縁部は横ナデ、胴部はヘラナデ。口唇部は下方に 仰せらる。 内側 口縁部は横ナデ、胴部は無文の當て具痕・ナデ。		口縁～胴部上位 1/3残。
3	須恵器 甕	口徑 底径 器高 —	①白色粒、チャート ②灰褐色 N5/ ③還元焰	外側 脱部は平行タタキ。 内側 大半が剥離する。		肩部片。
4	須恵器 （燒）	口徑 底径 器高 —	①白色粒、チャート ②灰褐色 N5/1 ③還元焰	外側 繪描き波状文。 内側 大半が剥離する。		小破片。
5	須恵器 甕	口徑 底径 器高 —	①石英・黒色粒 ②灰褐色 N6/ ③還元焰	外側 脱部は平行タタキ後ナデ。上位に灰かぶり。 内側 脱部は同心円状當て其底、一部をナデ。		腹部片。

第6章 遺構外出土遺物（遺物：第33・34図、第9表、PL. 11）

ここでは表探・表土層・遺物包含層・複乱内から出土したもの、住居跡等から出土したものの時期等を考慮してその遺構に伴わないと判断したものと扱う。遺構外出土遺物として縄文時代から近世のものが確認されているが、本章では縄文時代のものを中心抽出した。縄文土器は前期中葉・中期中葉～後葉？のもの、石器は打製石斧・スクレイバー類・砥石・多孔石などが出土地している。



第33図 遺構外出土遺物①



第34図 遺構外出土遺物②

第9表 遺構外出土遺物観察表（第20図、PL. 11）

番号	器種	法像	①胎土 ②色調 ③焼成	文様、成・整形の特徴	備考
1	縄文土器	口径 底径 器高	— — —	①織維、白色粒、黒色粒 ②明黄褐色 10YR7/6 ③酸化焰	L.Rの単面織文。 前期黑浜式。 B区。
2	縄文土器	口径 底径 器高	— — —	①石英、角閃石 ②灰黄色 2.5Y7/2 ③酸化焰	4条の降帯、斜位の平行沈線に刻み。 中期中葉式。 B区。
3	縄文土器	口径 底径 器高	— — —	①石英、白色粒、黒色粒 ②褐色 7.5YR4/4 ③酸化焰	R.Lの単面織文。 中期後半葉式。 B区。
4	打製石斧	長さ 幅	11.4cm 3.9cm	厚さ：1.5cm 重さ：71.2g 石材：頁岩	A 2 区 1 庫。
5	打製石斧	長さ 幅	11.1cm 5.2cm	厚さ：2.4cm 重さ：117.2g 石材：頁岩	A 1 区 1 庫。
6	スリガハ	長さ 幅	9.3cm 13.2cm	厚さ：2.6cm 重さ：302.5g 石材：頁岩	B区。
7	砾 石	長さ 幅	(17.7cm) 12.6cm	厚さ：8.2cm 重さ：(2825.3g) 石材：輝石安山岩	B区。
8	多孔石	長さ 幅	18.2cm 15.0cm	厚さ：11.0cm 重さ：41.0kg 石材：輝石安山岩	B区。

第7章 まとめ

第1節 住居跡

本遺跡ではB区で4軒の堅穴住居跡がまとまって確認されており、その所産時期は4号住居跡が7世紀、1・2・3号住居跡が9世紀後半に對比される。全体が把握できた1～3号住居跡を概観すると、平面は面積15～25m²程の中～小型長方形で、柱穴が認められず、東ないし南東壁にカマド、住居跡の隅に貯蔵穴が付設される該期の典型的な事例といえよう。周溝は部分的に配され、2・3号住居跡の南壁寄りには出入口施設に伴うと推測される小穴が検出されている。

3号住居跡は壁面に認められる段の存在や床下土坑が貼り床を切っていることから改築が想定され、平面が東・西・南側に5～15cm広く、床面が10～20cm高く再構築されたようである。壁を広げる際に発生する土を床面に盛土している蓋然性が高く、このような事例は周辺の芳賀団地遺跡群や上白駒山遺跡¹⁾でも調査されている。なお、旧床面に盛土するための土量約1.6m³を壁面の土で確保するには1.2mほどの壁高が必要であると算出される。ところで、カマドはほとんど残っていないかったが、複雑な埋没状態が観察された。大型床下土坑の存在・カマドが付設される東壁の拡幅・まとまった焼上を含むカマドの掘り方などを考慮すると、改築の際にカマドも作り直されていた可能性が窺われる。

B区から約150m南西に位置する時沢西高田遺跡では7～9世紀の住居跡・掘立柱建物跡・9世紀の溜井遺構などが調査されており²⁾、本遺跡と同一集落に属していると推測される（第35図）。同遺跡では9世紀の住居跡から「中」、溜井遺構から「雜」の字が記された墨書き器が出土し注目されるが、本遺跡でも2例の墨書きが確認されており、2号住居跡出土の須恵器坏では「上」の字が判読できる。

第2節 土 坑

B区で4基の土坑が確認されている。いずれも機能・用途などは不明であるが、1・4号土坑はやや特異な様相が窺われた。1号土坑は平面が不整な隅丸方形を呈し、多量の礫や土師器・焼土・灰が検出された。所産時期は9世紀に對比される。4号土坑は平面が細い隅丸長方形を呈し、深い掘り込みを有する。周間に小穴の配列が認められるものの、その関連性は不明である。底面で大型の砥石が出土した。

第3節 溝 跡

A区で北東～南西方向に流下する大規模な溝跡（1号溝跡）が確認されており、所産時期が底面付近出土の遺物から10世紀以前に對比される。ただし、溝跡の中層で浅間B輕石や柏川テフラが堆積していることから、流水は12世紀になんて底を浅くしながら継続していたようである。降灰後も流路は機能しており、修繕された部分も観察された。また、浅間B輕石や柏川テフラが認められることから限定期間（約20年）における明確な堆積状況が把握できている。その間層の厚さは0～10cm程だが、A2区南側では15～30cm程となっており、一様でない埋没過程が垣間見られる。

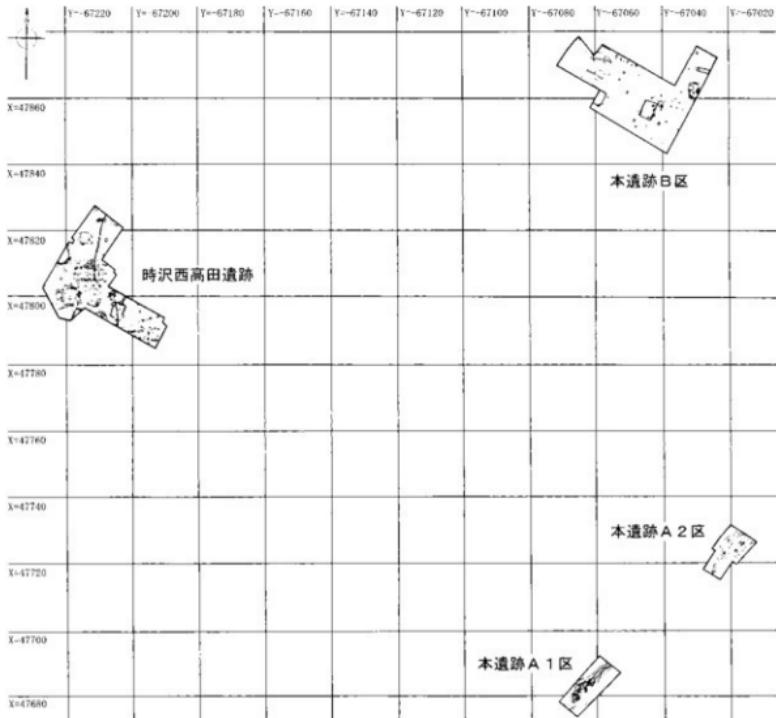
1号溝跡のA1区南側は他地点に比べて幅が広く、深い。壁面の下位よりも上位が張り出す部分も認められる。溜井などの施設を連想させるが、周辺の調査に期待するところである。また、この場所は大型自然礫が露出する部分でもあり、流水による営みや溝の開鑿の際にその形態に影響を及ぼしていた可能性も考慮しておく必要があろう。

本事例は蛇行を繰り返す形態などから、自然の河川と區別が難しい。しかし、断面形態や底面の段差など

人為を窺わせる痕跡が認められることから、埋没河川を再掘削して確保された用水路³⁾である可能性が想起される。これは、旧河道を利用することから、長距離間を一定の勾配に保つ高度な技術を必要とせず、在地的な労働力の集結に依存できる技術であったとされている。なお、1号溝跡を南側に迫ると田の区画が川のように蛇行し現在の用水路に連なる（4図）。溝跡の影響は現代の土地利用や地境にまで及んだ可能性が予想される。

1号溝跡とB区で確認された集落との関係は、溝跡の開闢時期が把握できないことから不透明である。しかし、A1区から約220m南に位置する東糀屋谷遺跡で10～11世紀の堅穴住居跡や12世紀の掘立柱建物跡群などが調査されており⁴⁾、溝とその脇に並存する集落の景観を復元することができる。特に、掘立柱建物跡群には三間四面の特異な施設などが想定されており、その係わりは興味深いところである。

- 注 1) 利島政彦 1995『上白駒山遺跡 寺門遺跡 筏田遺跡』群馬県勢多郡富士見村教育委員会
 2) 鈴田貴之 2004『時沢西高田遺跡』群馬県勢多郡富士見村教育委員会・富士見村遺跡調査会
 3) 鈴木徳雄 1998『古代北武藏における農業と土地利用－埼玉県児玉郡の考古学的事例を中心に－』『治水・利水遺跡を考える』東日本埋蔵文化財研究会・山梨県考古学協会
 4) 利島政彦 1992『東糀屋谷』『遺跡』群馬県勢多郡富士見村教育委員会



第35図 本遺跡および時沢西高田遺跡の位置 (1:1,500)

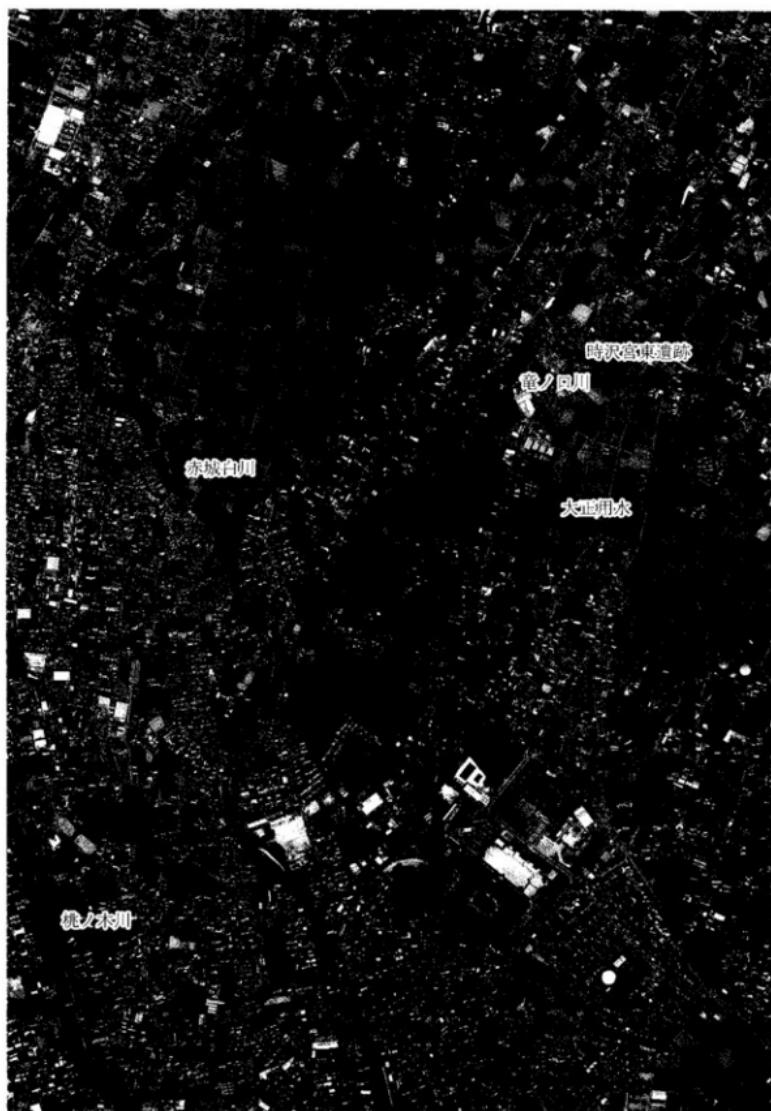
抄 錄

フリガナ	トキザワミヤヒガシイセキ
書名	時沢宮東遺跡
副書名	店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ	
シリーズ番号	
編集者	福田貴之・長井正欣・高橋清文
編集機関	群馬県勢多郡富士見村教育委員会
所在地	群馬県勢多郡富士見村大字田島866-1
発行日	平成18年12月25日

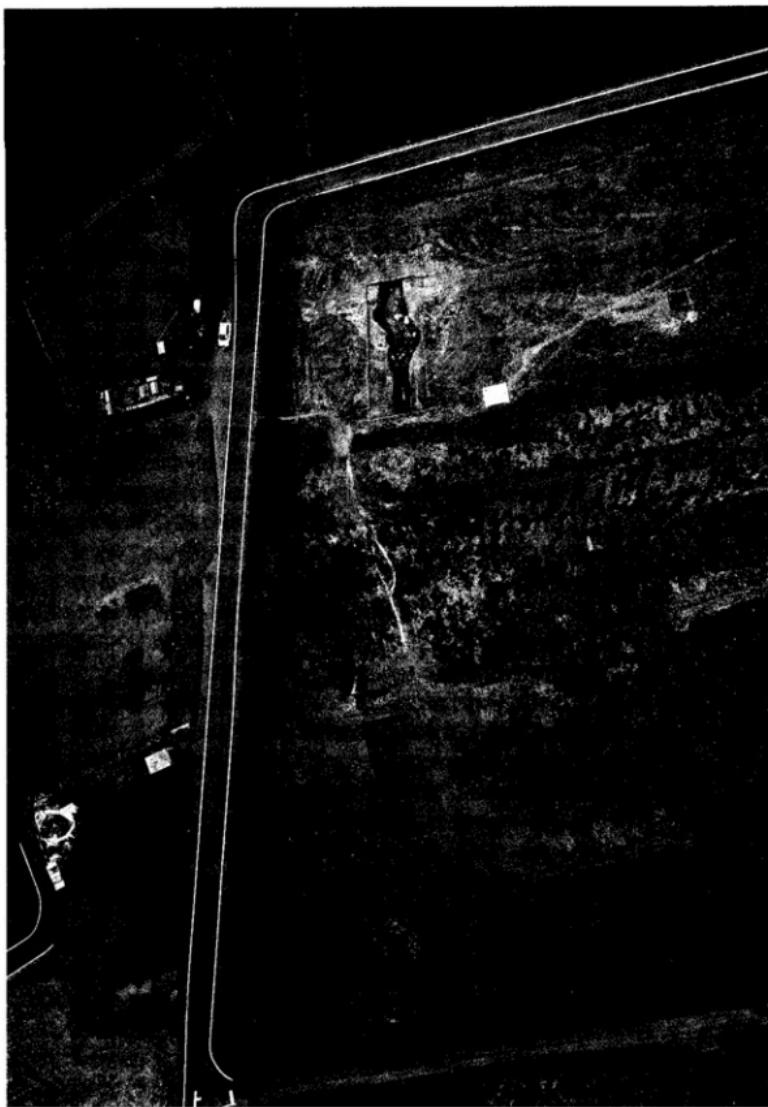
所収遺跡	所在地	コード		北緯 (°'")	東経 (°'")	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
時沢宮東遺跡	群馬県勢多郡富士見村大字時沢			36° 25' 42"	139° 05' 07"	20060529 ~ 20060620	1,275 m ²	店舗建設

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
時沢宮東遺跡	集落	古墳時代 平安時代	整穴住居跡 溝跡 土坑 小穴	調文土器 石器 土師器・須恵器 陶磁器	平安時代の集落 平安時代の溝跡

写 真 図 版



遺跡の位置と周辺の地形（上が北）



A区全景（上が南西）



A 1区全景（上が北西）



1号溝跡（A 1区）①（南西から）



1号溝跡（A 1区）②（南東から）



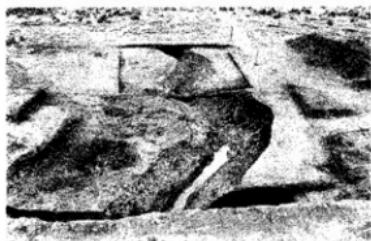
1号溝跡（A 1区）③（南西から）



1号溝跡（A 1区）土層（南西から）



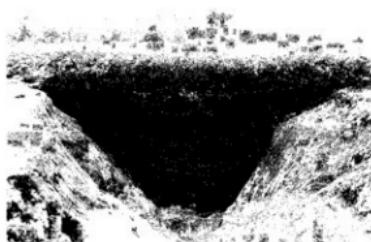
A 2 区全景（上が北西）



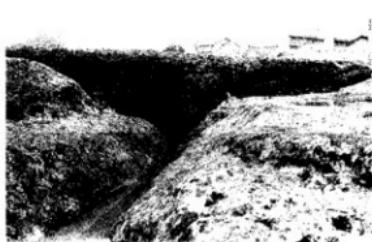
1号溝跡（A 2区）（北東から）



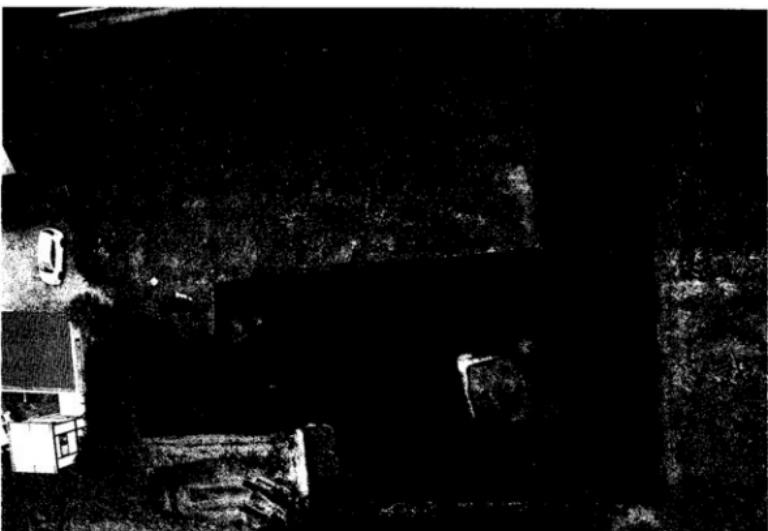
1号溝跡（A 2区）南側（北東から）



1号溝跡（A 2区）土層（北東から）



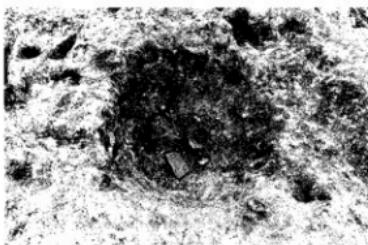
1号溝跡（A 2区）上層（南西から）



B区全景①（上が北東）



1号住居跡全景（西から）



1号住居跡貯藏穴遺物出土状態（西から）



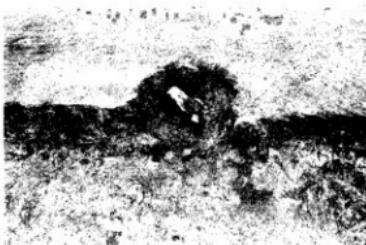
1号住居跡カマド土層（北西から）



1号住居跡カマド（西から）



2号住居跡全景（西から）



2号住居跡カマド（西から）



3・4号住居跡全景（西から）



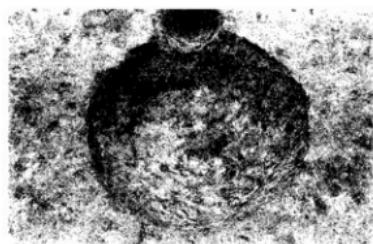
3・4号住居跡掘り方（西から）



1号土坑（南から）



2号土坑（南東から）



3号土坑（南から）



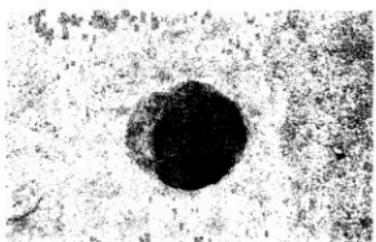
4号土坑（西から）



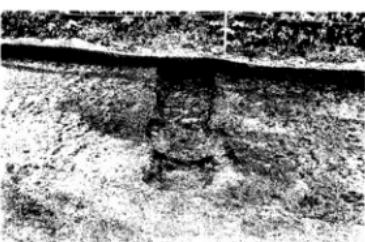
4号土坑・2～6号小穴 (南から)



29～32・37号小穴 (南から)



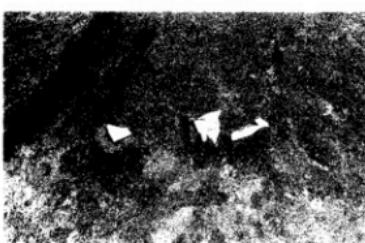
1号小穴 (南から)



2号溝跡 (西から)



1号倒木痕 (西から)



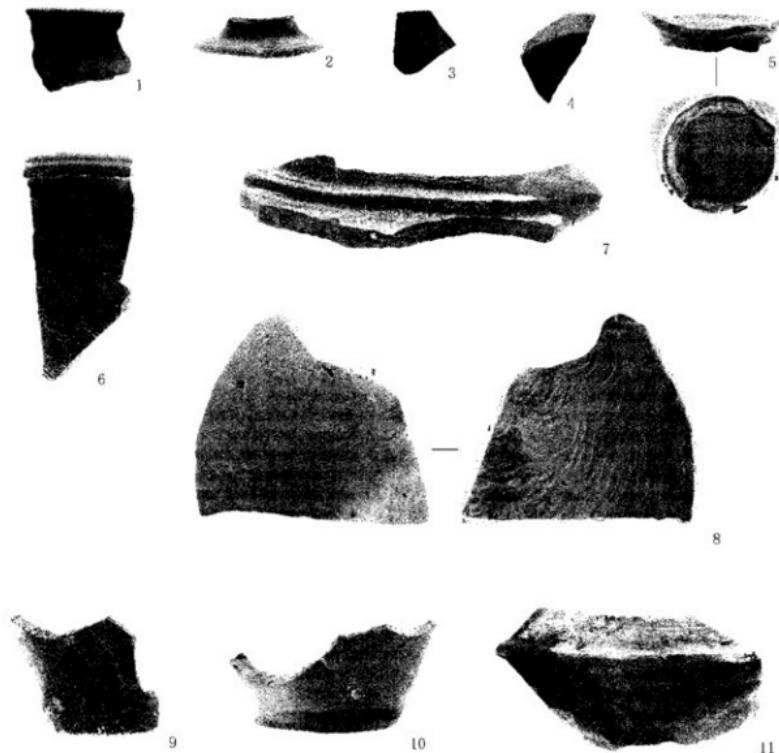
1号倒木痕遺物出土状態 (西から)



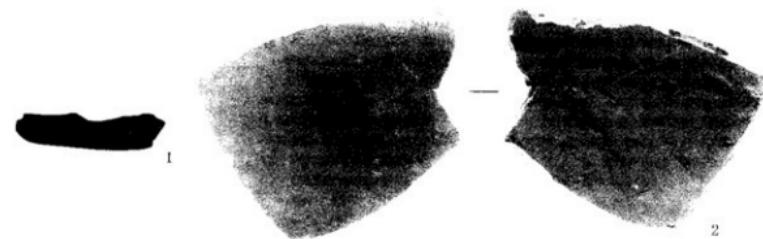
B区全景② (南から)



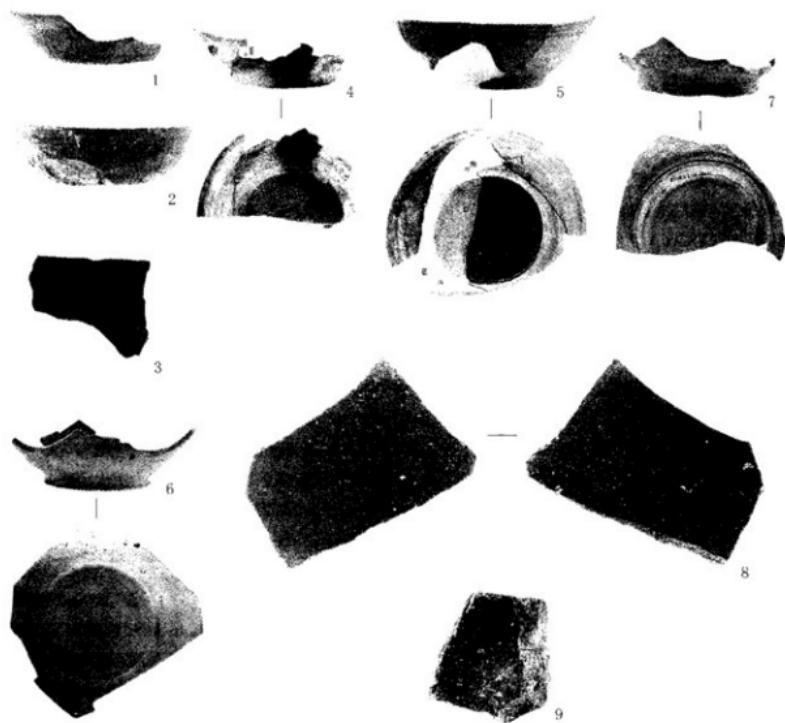
B区作業風景 (西から)



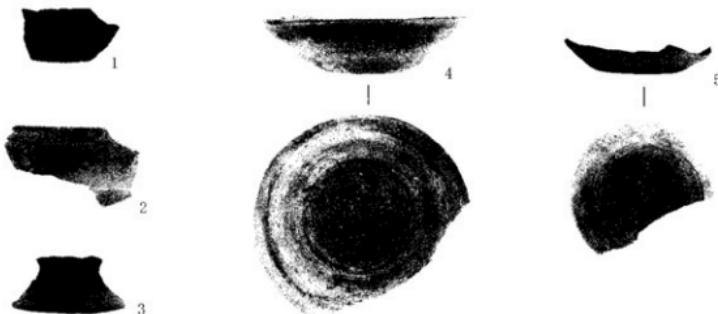
1号溝跡（A1区）出土遺物



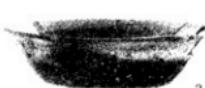
1号溝跡（A2区）出土遺物



1号住居跡出土遺物



2号住居跡出土遺物①



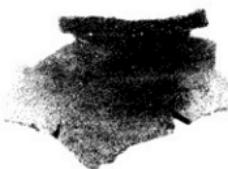
2 号住居跡出土遺物②

3 号住居跡出土遺物

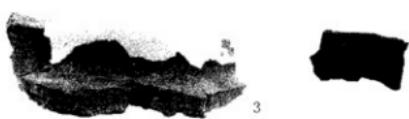


4 号住居跡出土遺物

1 号土坑出土遺物



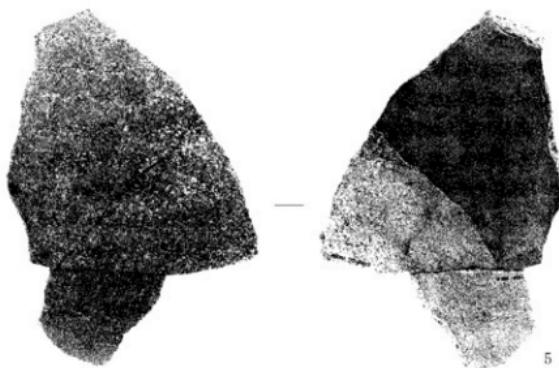
2



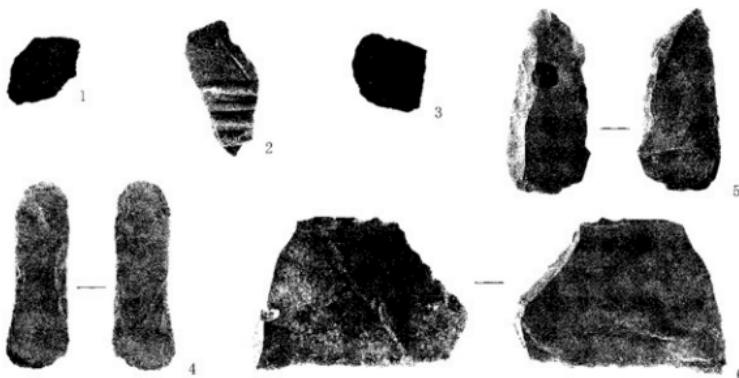
4

4 号土坑出土遺物

1 号倒木痕出土遺物①



1号倒木痕出土遗物②



遗构外出土遗物

平成18年度
時沢宮東遺跡
-店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-

平成18年12月20日印刷
平成18年12月25日発行
発行／群馬県勢多郡富士見村教育委員会
群馬県勢多郡富士見村大字田島 866-1
電話 (027) 288-6111
印刷／朝日印刷工業株式会社
